

菊鹿町文化財調査報告 第4集

こめ

やま

米の山城跡 II

—— くま べ やかた とりで あと ——
隈部館関連の砦跡

1998年

か もと ぐん きく か まち
熊本県鹿本郡菊鹿町教育委員会

菊鹿町文化財調査報告 第4集

こめ やま
米 の 山 城 跡 II
—— くま べ やかた とりで あと
隈 部 館 関 連 の 碧 跡 ——



(桑原地区より遠望)

1998年

か もと ぐん きく か まち
熊本県鹿本郡菊鹿町教育委員会

ご挨拶



上永野地区の米の山城跡の調査も2年目を迎えました。時折、その米の山城跡と猿返城跡の高山を遠望しますと、季節や気候によって、薄青色、青黒色など、様々な色合いに変化します。全山が、ガスに覆われることも、しばしばです。これらは、高山特有の現象であり、改めて大変な場所に城が築かれたものと驚くしだいです。

そもそも、隈部氏は、我が菊鹿町を根拠地に活躍した菊池氏の重臣ですが、戦国時代後半、菊池氏に代わって隈府城に入城し、勢力が最大となります。今でいう県北の雄となったわけです。その後、豊臣秀吉の九州統一後に、肥後へ入国した佐々成政に対する旧土豪勢の一揆では、中心的な役割を果たすことになります。

この行動は「肥後の国衆一揆」と呼ばれるものですが、結局、秀吉の差し向けた軍勢によって鎮圧され、隈部氏をはじめとする旧土豪は、歴史の舞台から姿を消すことになります。肥後の中世が完全に終わりを告げた大事件です。秀吉による領土安堵と、佐々成政の検地強行という政策は、確かに矛盾しており、蜂起せざるを得なかった肥後の武将達に、心の痛みを感じます。このことについては、県立装飾古墳館制作の3D映像『生きていた石人』の中で、「肥後の反骨精神」として表現されており、嬉しく思いました。

これまで、隈部氏の関連遺跡としては、県指定史跡の隈部館跡が最も知られる所でした。しかし、去年度からの調査で、新たに、猿返城跡と米の山城跡が加わりました。これを契機に、将来は、県指定の枠を米の山城跡や猿返城跡に拡大したいと思います。これらは、かけがえのない隈部氏の文化遺産で、調査と保存・活用に努める所存です。

しかし、一方で、「高山の山腹斜面に石墨を築く」という、無意味とも思える程の大土木工事が気になります。現代の尺度では、到底、理解することができません。標高755m強に及ぶ米の山に、いかなる理由で石墨を築いたのでしょうか。隈部氏のパワーに驚かますが、一方で、私には、夢物語りとして、別の期待感もあります。

以前、私は、長崎県の対馬へ渡り、古代山城の金田城跡を全域、踏査したことがあります。実は、米の山城跡の石墨が、その時、実見した金田城跡の石墨に非常に似ているのです。御存じのとおり、町内には、県で唯一の古代山城・鞠智城跡があります。ついで、この鞠智城跡との関連を思い浮かべてしまいます。最も、両城跡の間には、かなりの距離がありますし、調査関係者に、この事を正しますと、総合的に判断して、中世の遺構だと返事でした。しかし、唯一の出土遺物は、平安時代のものであり、私は、心の隅に、まだかすかな期待を残しています。少なくとも、「米の山城跡は、古代山城を転用したのではないか」という夢を抱いています。今後の、さらなる調査に期待したいと思います。

将来は、隈部館跡を起点に、猿返城跡と米の山城跡を結ぶ中世の道を自然遊歩道として整備する構想を抱いています。最終的に、隈部氏の城下町であった上永野地区に、歴史体験ゾーンなるものが完成しますなら幸いです。

平成10年3月31日

菊鹿町長 隈部弘正

序 文

菊鹿町教育委員会では、平成8年度から、町の自主事業として、隈部館周辺の砦跡調査に取り組んでいます。今年度は、米の山城跡に残る石塁の測量調査を行いました。昨年度の測量調査の際に、所在が確認されたもので、高山の山頂直下に列をなす有様には、驚くばかりです。現場に立ちますと、当時の工事関係者の苦労が目に浮かび、歴史の重みを実感します。どのようにして石材を確保し、如何なる工法で、石塁を築いていったのでしょうか。それにしても、標高755m強の高所に、何故、この様なものが必要だったのでしょうか。現代人の思考尺度では、とうてい理解できない代物の遺構です。大きな謎ですが、城に詳しい大田幸博先生に尋ねますと、山城に残るこの様な形式の石塁は、多くの場合、遠くの敵に対して威圧感を与えるのが主たる目的らしく、「張り子の虎」的なものということでした。

今年も、昨年と同様に年間を通じて、関係者がそれぞれ役割を分担して、困難な調査に挑みました。この様な調査が、考古学の原点であると確信しております。結果として、『米の山城跡Ⅱ』調査報告書を作成することができましたことは、大きな喜びです。既刊の『隈部館跡』・『猿返城跡・米の山城跡』の調査報告書と合わせて、御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成10年3月31日

菊鹿町教育長 平 嶋 靖 弘

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査の進展	1
第3節 調査の取り組み	1
第Ⅱ章 城跡の概要	2
第1節 菊鹿町について	2
第2節 米の山城跡について	6
第Ⅲ章 調査の成果	13
第1節 石壙の調査	13
第Ⅳ章 まとめ	30
近世・近代の文献に見る「米の山城跡」	32
隈部物語	33

図版目次

第1図 菊鹿町位置図	2	第10図 石列A側面実測図	21
第2図 菊鹿町地形図および中世城跡分布図	3	第11図 石列B上面実測図	23
第3図 隈部館・猿返城跡・米の山城跡周辺地形図	7	第12図 石列B側面実測図	23
第4図 米の山城跡周辺地形図	9	第13図 石列C上面実測図	25
第5図 米の山城跡全体測量図	11	第14図 石列C側面実測図	25
第6図 出土遺物実測図	13	第15図 石列D上面実測図	27
第7図 南西南山腹区域図	17	第16図 石列D側面実測図	27
第8図 検出石壙全体実測図およびグリッド設定図	19	第17図 石列E上面実測図	29
第9図 石列A上面実測図	21	第18図 石列E側面実測図	29

表目次

第1表 調査の経過表	1	第4表 文献別武器対数表	34
第2表 菊鹿町中世城跡一覧表	5	第5表 文献解題一覧	34
第3表 出土遺物観察表	13		

写 真 図 版

- 図版1 猿返城跡・米の山城跡・八方ヶ岳 遠景 (下永野地区から望む)
- 図版2 猿返城跡・米の山城跡 遠景 (高池地区から望む)
- 図版3 石壠I区 石列A 中央から下方を望む
- 図版4 石壠I区 石列A 中央から上方を望む
- 図版5 石列A側面
- 図版6 石壠II区 石列B側面
- 図版7 石壠II区 石列B側面
- 図版8 石壠II区 石列B 下方から上方を望む
- 図版9 石壠II区 石列B 上方から下方を望む
- 図版10 石壠II区 石列D側から石壠I区を望む
- 図版11 登山道から石壠II区を望む
- 図版12 石壠II区 石列D側から下方を望む
- 図版13 石壠II区 下方から上方を望む
- 図版14 石壠II区 上方から下方を望む
- 図版15 石壠II区 上方から下方を望む
- 図版16 石壠I区 下方から上方を望む
- 図版17 石壠II区 石列D側面 下方から上方を望む
- 図版18 石壠I区 石列C側面 上方から下方を望む
- 図版19 石壠I区 石列C側面 上方から下方を望む
- 図版20 石列C
- 図版21 登山道から上方を望む
- 図版22 石壠I区 石列C側面 下方から上方を望む
- 図版23 石壠III区 石列E
- 図版24 石壠III区 石列Eの反対側斜面 (崩壊している)
- 図版25 発掘調査風景
- 図版26 発掘調査従事者
- 図版27 出土遺物

例 言

1. 本書は、熊本県鹿本郡菊鹿町上永野に所在する米の山城跡の石壠計測調査の報告書である。
2. 調査は、菊鹿町教育委員会が主体となって行った。
3. 石壠の計測調査は、城郭研究者の大田幸博氏(熊本県教育庁文化課主幹)が行い、松舟博満氏(日本考古学協会会員)が、一部区域の発掘調査を担当した。
4. 調査に際しては、上永野地区の有志から多大な協力を得た。
5. 本書の執筆と、遺構の写真撮影は、大田氏が行い、一部を飯川が行った。
6. 「隈部物語」の異本の翻刻には、西山真一郎氏(熊本県文化課嘱託)があつた。
7. 図面の整理と編集実務は、石工みゆきさんと溝口真由美さんが行った。
8. 本書の編集は、菊鹿町教育委員会が行った。

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織

調査主体 菊鹿町教育委員会
調査責任者 平嶋靖弘（菊鹿町教育長）
調査者 大田幸博（熊本県教育庁文化課主幹） 松舟博満（日本考古学協会会員）
飯川康秀（菊鹿町社会教育課主査）
協力者 竹下輝幸（菊鹿町文化財保護委員） 中満二人（元菊鹿町文化財保護委員）
調査事務局 岩井賢太（菊鹿町社会教育課長） 吉里敏明（同課主幹） 飯川康秀
報告書作成 石工みゆき 溝口真由美 大田幸博
測量補助員 永田六三子 青木祐子 丸山敏郎 横田 巧 中満宣道

第2節 調査の進展

菊鹿町には、県指定史跡の隈部館跡をはじめとして、猿返城跡、米の山城跡、山内城跡、日渡城跡、山ノ井城跡、若宮城跡、鷹取城跡の中世城跡が分布している。町教育委員会では、これらの城跡について、これまで下記の様な調査を実施してきた。平成5年度からの調査は、いずれも町の自主事業である。特に平成8年度からは、隈部館の周辺に配置された砦跡の調査に取り組んでいる。今年度は、米の山城跡から発見された石壘の計測調査を行った。

調査年次	調査箇所	調査内容と成果	調査報告書
昭和49年～昭和51年	隈部館跡	昭和49年3月に、中世城館跡として、県下で2番目の県指定史跡となった。指定を契機に、3ヶ年計画で、館の発掘調査と環境整備を行った。礎石建物跡と庭園跡を検出したが、遺物は皆無に近い状態であった。	_____
平成5年	隈部館跡	昭和49年度の発掘調査は、報告書が未刊であったため、露出展示されている遺構の再計測と城域の測量を実施。	菊鹿町文化財調査報告 第2集
平成7年	鷹取城跡	『菊鹿町史』に城域図面を掲載するため、測量調査を実施。	『菊鹿町史』中世編に収録
平成8年	猿返城跡 米の山城跡	隈部館跡の周辺に分布する砦跡を調査し、城域の測量図面を作成した。米の山城跡から大規模な石壘を発見。	菊鹿町文化財調査報告 第3集
平成9年	米の山城跡	平成8年度の調査で、所在が確認された石壘の計測調査を実施した。	菊鹿町文化財調査報告 第4集

第1表 調査の経過表

第3節 調査の取り組み

菊鹿町教育委員会が調査主体となり、米の山城跡の石壘調査を行った。昨年度に続いて、中世城跡研究家の大田幸博氏の指導のもと、関係者が一致団結して行った。石壘には、地表土が薄く堆積していたので、慎重に排土した後、計測調査に取り組んだ。ただし、一部の箇所で石壘が完全に埋没している箇所があったので、これについては、年度末に松舟博満氏へ発掘調査をお願いした。

城跡は、標高755m強の高所にあり、今年度の調査も困難を極めた。夏季は、現場にいたるまでが一苦労で、汗にまみれての登山となった。それでも、山頂にも短い夏が訪れ、しばしの蝉時雨に心がなごんだ。一

方、冬季になると厳しい寒気が襲った。ある時は、ビニールシートを張った簡易の休憩所が積雪で押し潰され、調査用具を雪の中から掘り出す珍事もあった。何よりも辛かったことは、寒さのために休憩をゆっくり取れなかつたことである。この様な厳しい条件のもと、今年度も年間を通じて、永田六三子さんと青木祐子さんが、調査作業に従事された。さらに地元の上永野地区からは、丸山敏郎氏を中心^{かみながの}に、中満宣道氏や横田巧氏から、多大な協力があつた。

困難を極めた資料整理と報告書の作成は、石工みゆきさんと、溝口真由美さんが中心となつて行つた。調査関係者に、深く感謝する次第である。

〔飯川康秀〕

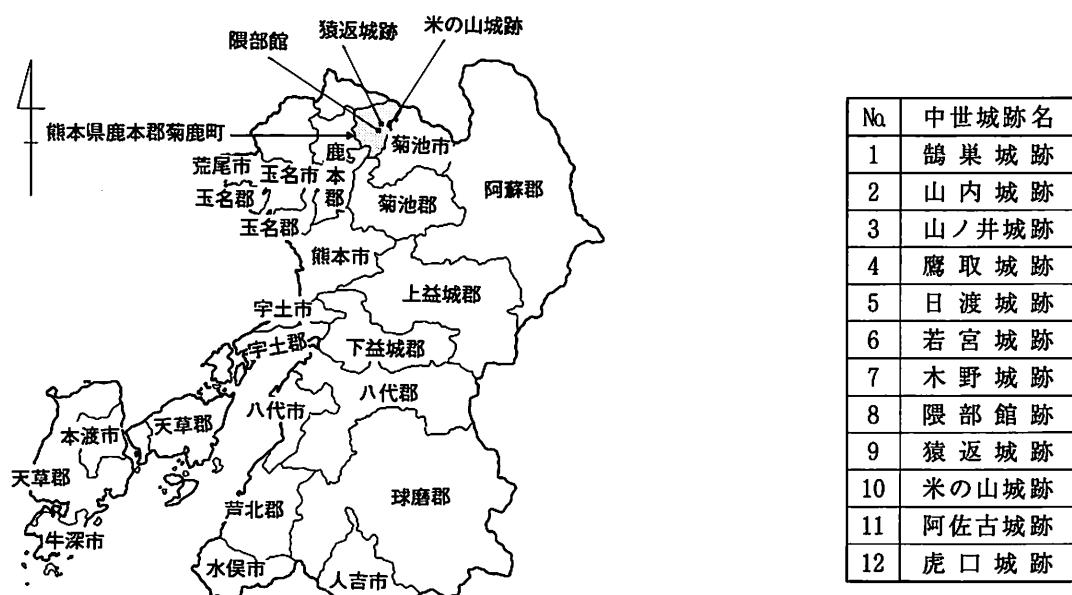
第Ⅱ章 城跡の概要

第1節 菊鹿町について

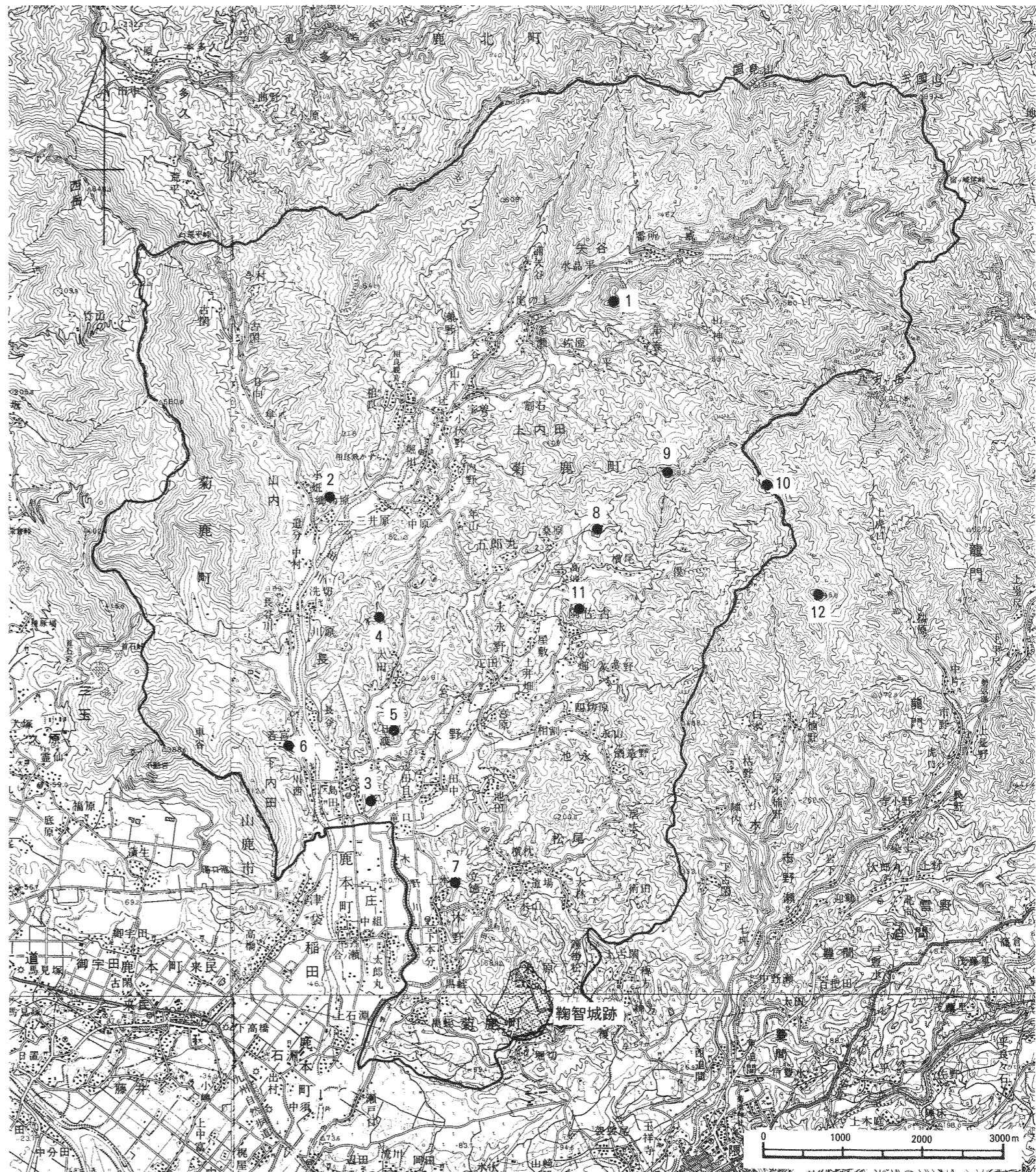
熊本県の北端部に位置する町で、大分県の南部に接している。行政域の最大幅は、東西10.9km、南北12.3km、総面積77.38km²。南北方向を主軸とした場合、北に広く南に狭い逆三角形に近い形状となる。行政域の東部から北部にかけての地勢は、八方ヶ岳、三国山、国見山等の高山が連なつてゐる。これらは、いずれも標高1000mクラスの山稜である。特に、八方ヶ岳の山稜から流れ出る水は、まとまって上内田川へ注ぎ、町内を北から南へ貫いてゐる。総じて「菊鹿盆地」と称されるように、北方に高山を荷い、南方へ丘陵地が漸次的に緩傾斜する状態にある。

最終的地形の一大変化点は、行政域が菊池市と接する所にあり、そこで丘陵は終わりを告げている。南下には、県下有数の穀倉地帯となる菊池平野の大きな広がりがある。

そのような自然環境のもと、今年度に調査した米の山城跡は、八方ヶ岳の南側山系にあり、標高750mの綾線上にある。ここは、菊池市東部との行政境をなす所でもある。



第1図 菊鹿町位置図



第2図 菊鹿町地形図および中世城跡分布図

No.	中世城跡名	所在地	城歴	現況
1	鶴巣城跡	大字上内田 字年ノ春	隈部親永が築城。 城代は二の家老の多久宗員。 (『古城考』)	「くうのすさん」と呼ばれる比高80mの山が城跡。目立つ遺構は、見当らない。
2	山内城跡	大字山内 字郷ノ原	隈部親永が築城。 (『肥後国誌』)	「城山」と呼ばれる比高45mの山が城跡。平場、土塁、堀切が残る。 郷ノ原地区は麓集落(中世の小規模な城下町)。
3	山ノ井城跡	大字下内田 字山ノ井	内田相良氏十一代の居城。 (『内田旧記』)	比高40mの山が城跡。 平場の造成は完全ではない。堀切と土塁が残る。城域に古墳。
4	鷹取城跡	大字太田 字鷹取	東氏三代の居城。 (『鹿本郡誌』)	比高120mの山が城跡。 造成された3区画の平場、堀切が残る。 小規模ではあるが、本格的な山城(砦)。
5	日渡城跡	大字下内田 字日渡	隈部親永の家臣であった富田氏 継が城代を勤めた。 (『古城考』)	比高50mの丘が城跡。 大規模城跡で、広い平地、「矢場」と呼ばれる大土塁、堀切、古井戸が残る。 焼米が出土する。
6	若宮城跡	大字下内田 字若宮	内田相良氏一族の城。 (『古城考』)	比高30mの丘が城跡。 平場と二重の堀切が残る。昭和53年に 県道改良工事で発掘調査を実施。 11世紀代の白磁碗を中心として、糸切り の土師碗や皿が出土。
7	木野城跡	大字木野	木野氏代々の居城。 (『古城考』)	比高40mの丘が城跡。 単郭形式の平場のみで、特に目立つ遺 構は、見当らない。
8	隈部館跡	大字上永野	隈部氏の居城。 (『肥後国誌』)	山腹に館跡がある。県指定史跡。 麓集落からの比高は120m。樹型の虎 口石垣、礎石建物、庭園、大規模な堀 切が残る。県を代表する城館跡。
9	猿返城跡	大字上永野	城主は隈部親永。 (『古城考』)	標高685mの高山に砦跡がある。隈部 館を守る砦。山頂に大土塁。館に面する 山腹側に、土塁を伴う削平地が重なる。 谷部に湧水地。
10	米の山城跡	大字上永野	築城者は宇野親徳。 (『古城考』)	標高755m強の高山に砦跡がある。隈部 館の「詰めの城」・「逃げ込みの城」と 考えられる。山頂に大土塁と石塁。山 腹に大土塁。尾根筋に堀切。
11	阿佐古城跡	大字阿佐古	城跡名を明記した文献はなく、 城主についても不明。	隈部館跡の近くの山。城跡という人も いる。今後に調査を予定。
12	虎口城跡	菊池市	隈部氏の城。 (『古城考』)	八方ヶ岳山系の砦跡。 猿返城跡～米の山城跡～虎口城跡と繋 がっている。

第2表 菊鹿町中世城跡一覧表

第2節 米の山城跡について

[概要]

標高755m強の高山に築かれた城跡で、同じ系列の尾根筋には、猿返城跡も存在する。両城跡の実質距離は、約4kmもあるが、今も尾根と山腹の間に、これらを結ぶ中世の踏み分け道が歴然として残っている。これらは、隈部氏の本拠地であった隈部館の周辺に配置された砦である。物見の場であるが、隈部館の非常時には、後背地から食料や武器などを送り込む補給基地であると共に、逃げ込み場や、詰めの城の役目を果したものと思われる。

米の山城跡への登城道は、猿返城跡から連続的に繋がる尾根筋ルート（踏み分け道）と山腹を登るルートがある。しかし、尾根筋ルートは、猿返城跡～米の山城跡だけで、優に一時間半もかかる遠道である。これに、猿返城跡への登山時間45分が加わる（猿返城跡の登城口は、隈部館から実質距離で、3.6km離れた林道・横尾線の途中にある）。

一般的な谷部ルートは、林道・横尾線の終点に登城口がある。隈部館跡から実質距離で5.3kmも離れた場所であるが、今日ここまで、車の乗り入れが可能である。ここは八方ヶ岳の登山口でもあり、途中まで同じ山道を進むことになる。20分ほど進むと分岐点があり、直進すると八方ヶ岳へ至り、西側へ折れれば、米の山城跡への登城道となる。この分かれ道から登っていくと、20分程で山頂に着く。

米の山城跡には、山頂をはじめとして、南側山腹や南西側及び北西側の尾根筋に砦跡としての遺構が手つかずのまま残っている。その中で、特に大規模造りの石壘が注目される。

[米の山城跡の存在理由]

米の山城跡の尾根筋に遮られるため、隈部館跡の北側背後に位置する猿返城跡から、菊池市の北部に広がる山間地域を望むことは出来ない。そこで、この尾根に伝えの城の「米の山城」を築くことによって、広範囲の眺望が可能となる。この事に加え、石壘などの遺構から、前述したように、非常時には、隈部館からの逃げ込みの場や詰めの城の役割も荷っていたと思われる。縄張りの残存状況から、猿返城跡と比較した場合、よりグレードの高い本格的な砦といえる。

[遺構について]

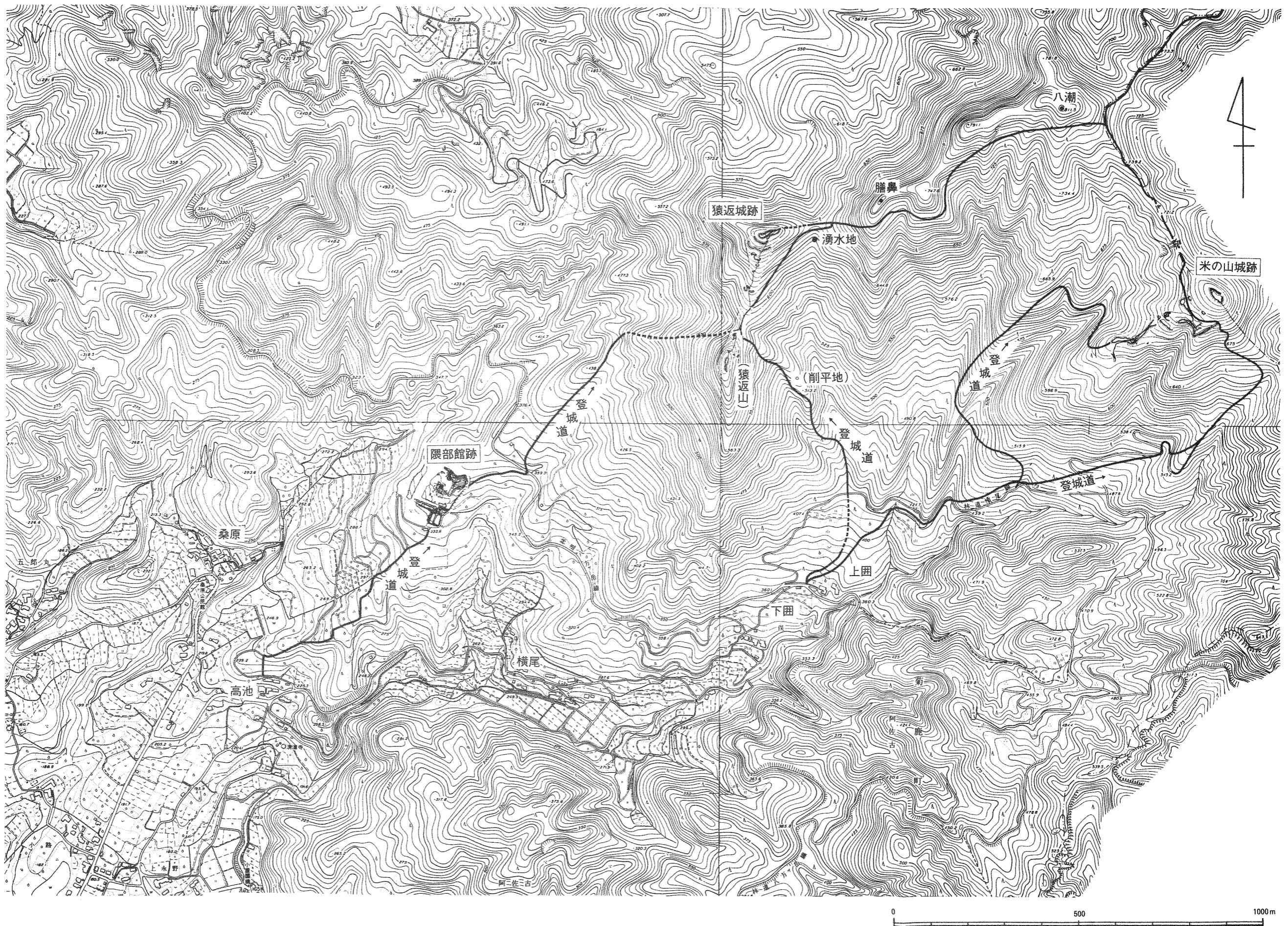
(1) 山頂遺構

山頂には49m×21mの長円形をした平場があり、北縁に高さ3.8m、長さ27mの大土壘が残っている。現況から、山頂の旧地形は北側から南側への緩傾斜地であった様で、これを削って平場が確保された事がわかる。従って、今も若干の傾斜地となっている。土壘は、山頂に堆土を叩き締めて、うす高く積み上げたものである。土壘の外側にあたる北側斜面は、垂直に近く、そのまま山頂直下の絶壁に繋がっている。

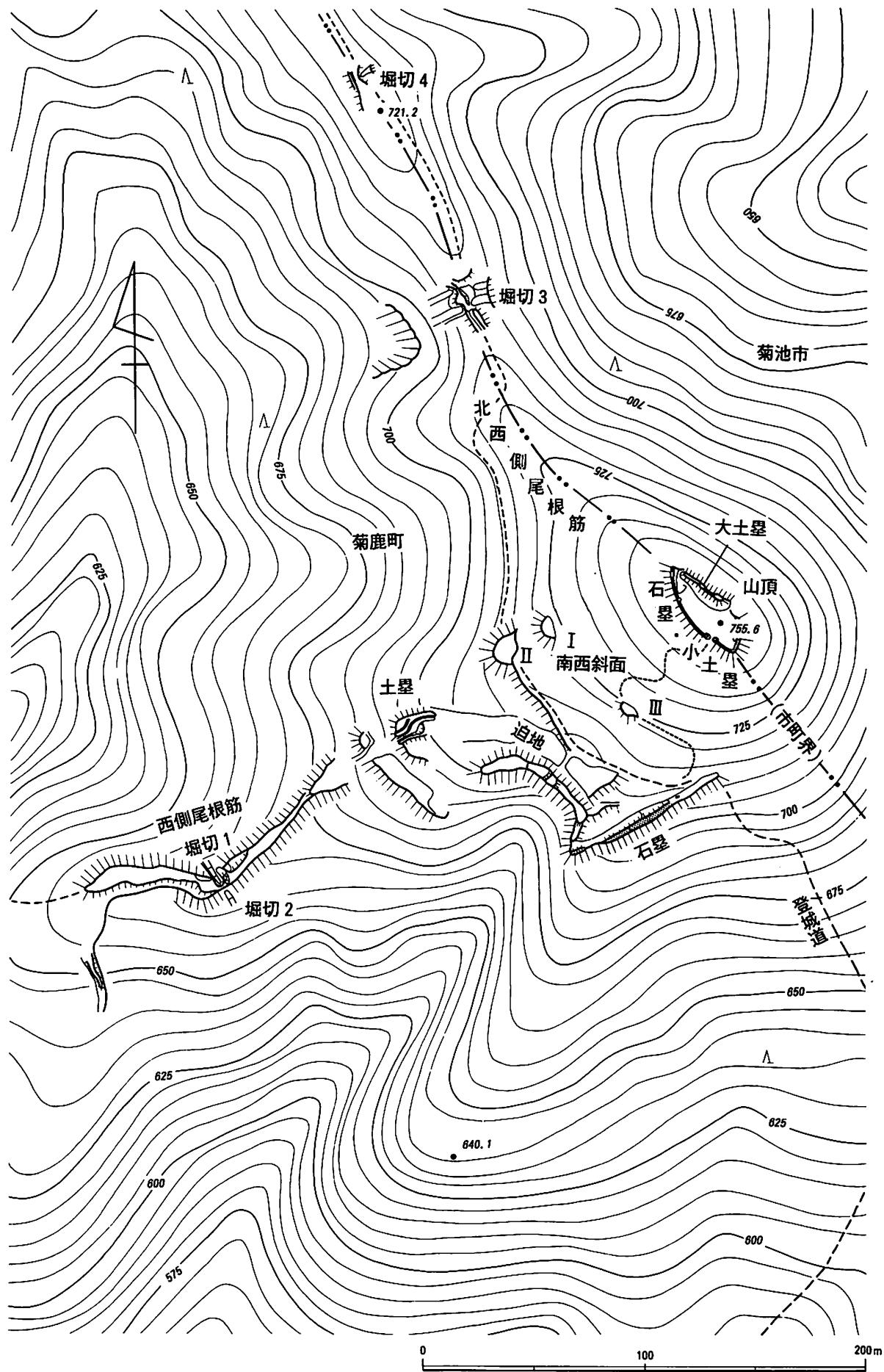
平場の縁部には、この土壘以外に、高さ0.2mの小土壘がぐるりと巡っている。今日、植林された桧が、南西方向（菊鹿町側）の視界を邪魔しているが、戦前までは、一面の原野で、山頂からの眺望は、絶景であったという（中満二人氏談）。それでも土壘上に立てば、大きな深谷を隔てて、北方向に八方ヶ岳の雄姿をパノラマ的に望むことが出来る。

さらに、山頂の東縁からは、虎口城跡と伝えられる尾根続きのコニーデ型の高山や、竜門ダムが建造された菊池市の北部山地が眺望される。

① 大土壘 全体の長さ27m、裾部までの幅は7m。形状は、南側で膨らみを持ち、上場の長さは21m、幅は1.0～1.5m。東側から西側へ傾斜し、2箇所に高まりがある。最高所は、標高759.40mで、平場との比高差は、3.8m弱。山頂に吹き付ける強風避けの土壘であろう。



第3図 隈部館・猿返城跡・米の山城跡周辺地形図



第4図 米の山城跡周辺地形図

② 小土壘 平場の縁を巡り、高さは0.2m前後。基底部に自然石（大石）の石列を伴う。試しに、抽出して計測した1石の大きさは、長さ1.4m、幅0.75m、厚さ20cm。西側寄りでは、偏平石も使用されている。

南東側に小土壘の途切れる箇所がある。ここが恐らく虎口で、開口部の両端は、一段高くなっており、門礎石らしき大石も残っている。ただし、ここに繋がると思われる山腹の登城道は崩壊が進んで、はっきりしない。一方、小土壘の西端部と大土壘の間は、3mほど開いているが、これは雨天時の水抜き箇所と思われる。そうでなければ、雨天時に山頂平場は、水浸しになってしまう。

(2) 山頂南西側斜面

標高724mラインから標高715mラインにかけて、舌状形をした3ヶ所の平場がある。登城道に関連した平場と考えられる。

(3) 山頂南西斜面下の区域

山頂直下の区域。尾根筋の張り出し部分で、標高709mラインに小規模な鞍部があり、これを境に、二つの平場区域が形成されている。

① 土壘と石列 区域の東縁全面に残っている。土壘には、内側と斜面部に石列が伴う。石列は、山頂部のものと同じで、凝灰岩の自然石と割石が使われている。

② 南縁の小山 区域の南側にある。最高所の標高は710.71m。上面に長さ15m、幅3～5mの平場がある。斜面部に削り落としの痕はない。

③ 迫地の平場区域 東側と西側に分かれる。東側は、長さ19m、幅6～17m。西側から東側への緩傾斜地で、東端部に整形の痕跡がある。西側は長さ60m、幅8～13m。地表面には、建物礎石らしい凝灰岩が点々と露出している。肩部には、石壁の様な石列がある。

④ 迫地の西端部 溜池状の窪地、土壘、石壘が残っている。遺構全体が、西側からの登城道の一部とも受け取れ、土壘に伴う石壘は、城門のように見える。窪地は5m四方で真中が、丸く膨らんでいる。深さは1.9m、上部は溝状に変化している。肩部の一部は、土壘となっている。この土壘には、大石が野面積みされている。

⑤ 迫地西下の区画 東側から西側への緩傾斜地で、長さ32m、幅7～9m。

(4) 西側尾根筋と堀切

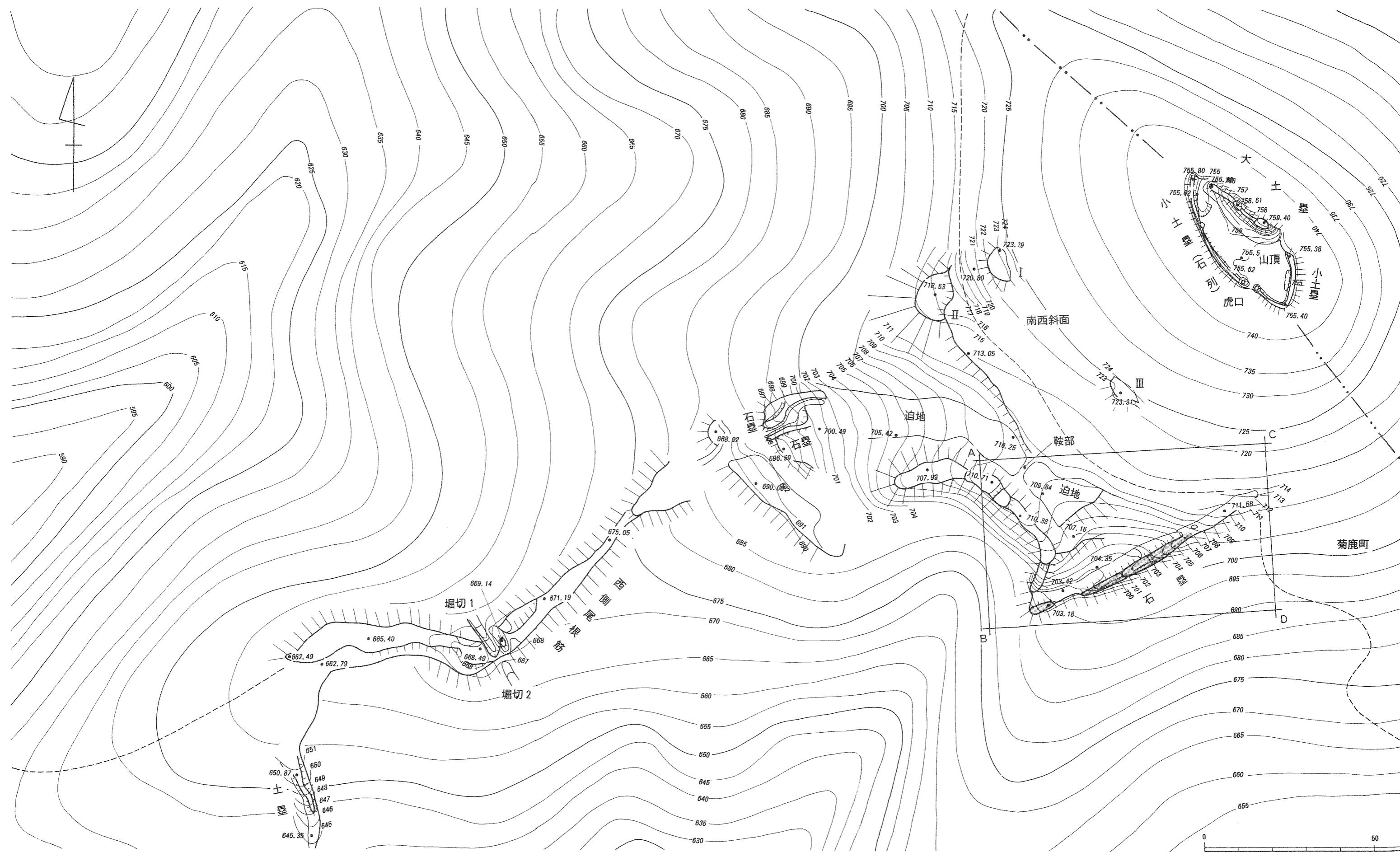
山頂南西斜面下の区域で、標高675mラインから、尾根筋は、瘦せ馬の背のように変化するが、53m先に、これを断ち切る堀切と土壘がある。尾根道で仕切られているが、元来、一つの造りであろう。今日、北側部分（堀切1）は、尾根筋に大きく食い込み、南側梁行、完全な堅堀（堀切2）となっている。

(5) 南西側尾根筋

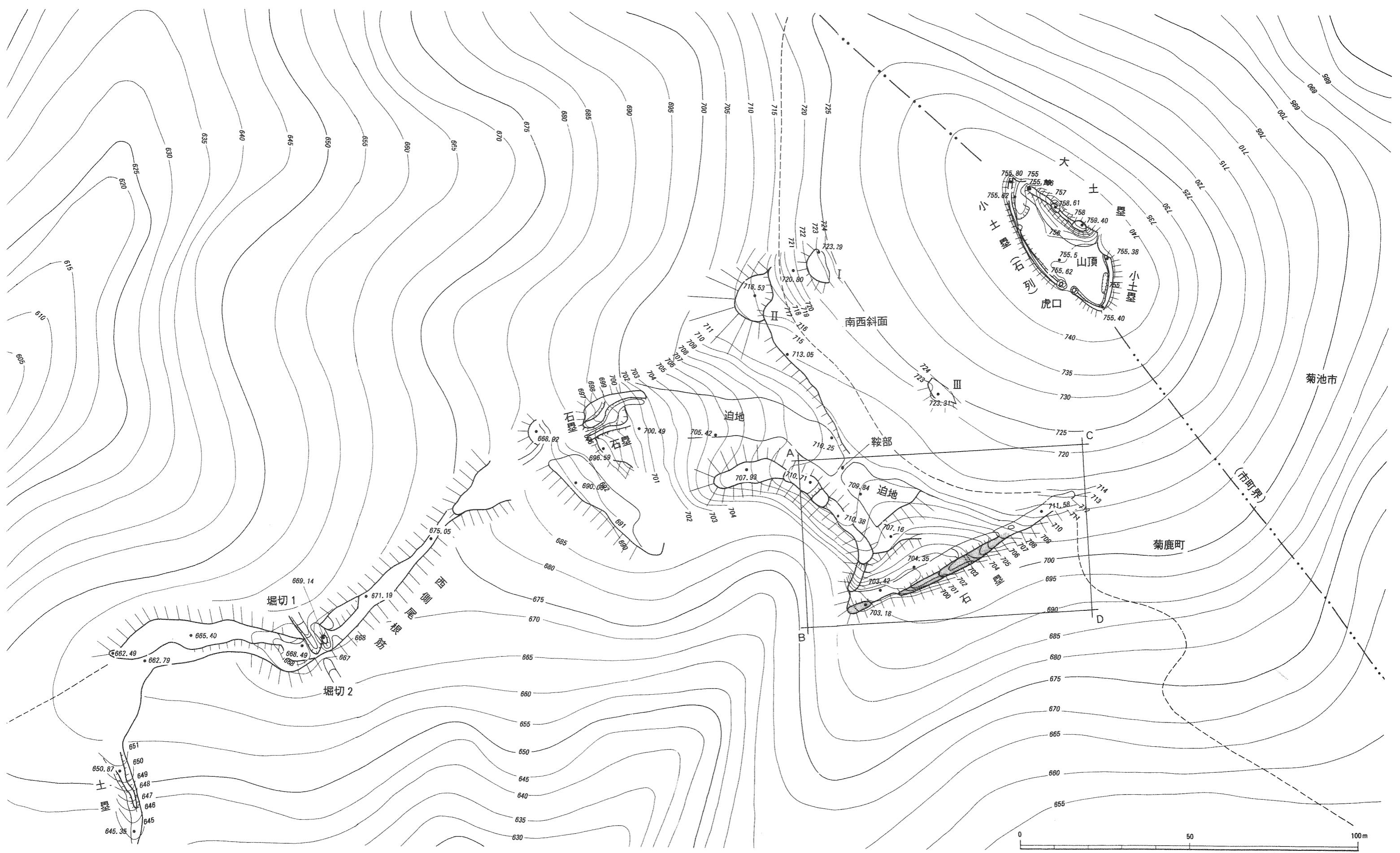
上面幅は、斜面部を含めて自然地形であるが、西端部から南側へ下った標高651m～647mラインに土壘が残っている。長さ17m、上面幅3～1.5m。

(6) 北西側尾根筋と堀切

山頂直下から北西側へ伸びる主軸尾根は、猿返城跡へ続く、山道でもある。ここには2箇所に堀切が残っている。山頂南下区域から130m離れた所（堀切3）と、さらに、それより95m離れた所（堀切4）で、戦時の際は、主軸尾根を遮断した重要な堀切である。



第5図 米の山城跡全体測量図



第5図 米の山城跡全体測量図

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 石壘の調査

平成8年度の城域測量で、山頂の南西斜面区域の東端の山腹に、**石壘**の一部と見られる大石の並びを発見した。山頂では、大石が長円形の平場縁を半周し、山腹でも、帶曲輪の縁に積まれた土壘から、大小の自然石と割石が確認された。しかし、山腹箇所は、表土(黒色土)に埋もれた状態であり、全体を把握することはできなかった。

今年度は、山腹の調査に取り組んだが、驚くべき結果となった。黒色土を移植ゴテで慎重に除去していくと、土壘の両裾部から、思いもかけない石列と石壁が検出されたのである。構造的には、叩き締めの積み土を「あんこ」状に芯となし、両サイドの裾部に大石と割石を配したものであった。もちろん、完全な状態ではなかったが、一部区域に限っては、築造当時の姿が推定可能な残存状況であった。構造的には、城内側が低く、外側に高い石壘である。ただし、崩れ落ちた積み石の量からすれば、高さ数メートルに及ぶ石壁とは考えられない。石壘は、東北東側から西南西側へ傾斜の状態にある。

表土の土量は大したことなく、およそ、破城によって意図的に石壘を埋め込んだ状態になかった。廃城後、石壘は崩壊し、上域からの流土で、徐々に埋まっていたものと思われる。この考えを裏付けるものとして、山頂の石壘は、ほとんど露出の状態にあったことが上げられる。地形的に埋没する状況下になかったからであろう。

石壘の石質は、全て凝灰岩である。山腹に母岩の大岩が見られるが、大半は、他地域からの持ち込みと推定する。切り石は、一石もなく、大石を積み石として、大小の割石をグリ石としている。大方直線的な走行であるが、地形に沿った積み方であるために、南西部に限り、内側へ弯曲する。

石壘の全体の長さは75m近くに達する。この内、今年度の調査では、長さ53mの範囲を実測した。残りは、次年度に調査予定である。

〔出土遺物〕

出土遺物は、皆無に近く、高台付き土師碗片と近世磁器碗の2点のみである。極めて生活感に乏しい遺跡である。



第6図 出土遺跡実測図

No	器種	器厚	形態の特徴	調整・文様	備考
1	高台付き 土師碗	底部 外底端 体部	6.0mm 9.0mm 5.5mm	体部は、やや内弯気味に立ち上がる。	内外器面ともナデ。 外器面下位にロクロによる稜線が入る。 〔胎土〕精良。 〔色調〕灰乳褐色。 〔焼成〕堅緻。
2	染付け 磁器碗	体部上位 中位 下位 底部中央 端部	2.0mm 3.5mm 6.5mm 3.5mm 6.0mm	[口径] 11.1cm [底径] 3.7cm [器高] 4.9cm 体部は僅かに内弯する。	外器面には銅版転写による「梅」の文様。 〔時代〕明治～大正時代 〔窯〕肥前系 〔器色〕灰白青色 〔呉須〕薄いコバルト色

第3表 出土遺物観察表

石壠Ⅰ区（石列A・石列C）

① 標高708mから705mの山腹・傾斜地（東北東側から西南西側へ傾斜）を下る石壠である。図面上での長さは15.0m(斜距離15.8m)を測る。土壠の積み土を「あんこ」として、両側面に石壁が貼り付く石壠である。「あんこ」部分の土壠幅は1.2m～1.4mで、両側面の石壁上面を含んだ全体幅は2m。

② 石列Aは、石壠内側の石壁である。大石を根石として並べ、上位に割石の角礫を積んでいる。a石は、その中で最大のものである。下部の長さが2m、^{ひびき}石面の高さも70cmにおよぶ三角形状の巨石である。石面は「ベターツ」としており、あたかも面取りされたかのようである。b石も、下部の長さが90cm、石面の高さが75cm、厚さ30cmの方形の巨石である。これらは、根石の石面だけで石壁となるような状況を呈している。ア点での高さは0.5m。土壠の土留め石の様なものである。ただし、石列Aは、P点から1.0m(斜距離)下ったところで終了している。これは、石壠Ⅰ区が山腹・傾斜地の縁に存在するからであろう。土壠の内側に「引き」の平場がなく、山腹に対して、じかに土壠が積まれているため、ある程度の高さまで登り詰めると、土壠の内側が山腹斜面に吸収された様である。石列Aの上域・直下には、積み石の一部と見られる割石が落石している。

③ 石列Cは、石壠外側の石壁である。石列Cは石列Aに対比するもので、土壠の上位縁に積まれている。P点は平成9年度の最終調査地点である。実際のところ、石列Cに限っては、これより、さらに上位部（東北東方向）に延びていくことが確実で、これについては、次年度に調査を実施する予定である。延長部分は、少なくとも長さ22m近くに達するものと思われる。

④ 石列Cは、石列Aと同様に大石を根石としているが、上位の積み石に相異がある。2～3石の偏平な割石が積み重ねられている。この割石は、いわゆるレモンの先端を輪切りにしたようなものである。近世城郭の石垣にも見られる現象であるが、奥行きのある積み石の先端部が長方形状に割り出されている。これに対し、近世城郭では、石面の加工方法が「削り出す」だけの違いにすぎない。この様な奥行きのある石を積み上げれば、安定感のある石壁や石垣が構築されることになる。石列Cはメリハリのある石壁で、P点での高さは、0.6m。いかにも城壁という感じがする。

⑤ 石列Cの直下には、P点から下位へ長さ6.5m(斜距離)の範囲に限って、犬走りの様な0.6～1.2m幅の平坦部（やや緩傾斜地で、P点での比高0.35m）がある。石列Cはここで明らかに区切りがついている。ただし、この範囲だけに見られるもので、いかなる意味を持つのか不明である。後世に、斜面部が大きく抉られたことも考えられる。

⑥ 犬走り的な平坦部の縁から下方にも、割石と大石の石群が見られる。P点では、斜距離で3.3m(比高2.1m)の範囲がそうである。石列Cが1段目の石壁なので、ここは2段目の石壁となる。そうすると斜面部の土壠・積み土に大量に混じる割石は、グリ石ということになる。この場合、本体部分の積み石が問題となる。如何なる形状の大石で城壁が形成されていたか、まったく予測がつかない状態である。中には、母岩的な大石が混じっているだけに、なおさらである。c石は、その典型的なもので、長さ90cm、上面幅40cm、厚さ45cm。全体が丸みを帯びて、およそ積み石として使用できない「しろもの」である。このようなものが、少なくも2石存在している。どう考えても、検出された割石の大半は、石壁のグリ石である。点在する大石の類は積み石と思われるが、例え「野面積み」であったとしても、前に記した様に、形が余りに歪で、石壠の積み上げに耐えらるものではない。これに加えて、大石そのものが、斜距離で3.3m幅もある「法面」を埋めるには程遠い石数の少なさなのも気になる。大半の積み石は、下部へ落石している可能性もあるが、それらしき大石の散乱は、周辺に見当らなかった。2段目の石壁に至っては、土壠の積み土に割石が貼り付けられていたのでは、という極論も生じるが、余りに不自然で、確信を持つには至っていない。

⑦ 土壠の上面は、P点から長さ8.7m(斜距離)の範囲に特色がある。^{こぶし}大の角礫が積み土の中へ大量に

混入している。それは石墨のグリ石というよりは、土墨の強度を増大させるための処置とも受けとれる。ただし、この範囲から下方については、角礫の混入量が減少しており、疑問が残る。

石壠Ⅱ区（石列B・石列D）

① 標高704.5mから703.0mの範囲を走行する石壠である。長さは22mで、両端の比高は1.45m。内側では、平坦面の縁に築かれた石壠という感じである。この点において、斜面部を下る石壠Ⅰ区とは違いがある。土壠の内側には「引き」がある。完全な平場とは言えないが、7.4m幅の帯曲輪的なものが土壠に平走していることがわかる。

② 石列Bは、石壠内側の石壁である。石列Aと同様に大石を根石として、上位に割石を積んでいるが、状況は、やや異なっている。全体的に根石の規模が大きい傾向にある。

石列Bの南西端にある2石の根石（d石・e石）は、石壠の角隅石であろう。この2石だけは石面が長方形で、石壠の端部をがっちり締めている。d石は下部の長さが85cm、石面の高さ55cm、角隅のe石は長さ1m、高さ40cm、厚み30cmの巨石である。特にe石から手前へ、長さ8.8m分の石壁は残存状況が良好である。原形に近い状態と推定される。この間の根石は、外傾が目立ち、土壠の側面へ寄りかかる状態に据えられている。

③ 土壠の上面は「あんこ」の積み土が露呈している。^{こぼし}拳大の割石の混入はない。土壠の上面幅は2m。特色としては、土壠の上面が内側から外側へ大きく傾斜していることがあげられる。すなわち石列Bに直接対比する肩部の外側・石列が、全部、欠損していることになる。したがって、斜面部に残存する石群の帶は、石壠Ⅰ区でいう2段目の石壁に該当することになる（石列D）。

地元の中満宣道氏の言によれば「丁度、石壠Ⅱ区あたりで、間伐材を投げ降ろしていた時期があった」とのこと、この際に1段目の石壁が、全て崩壊してしまったとも考えられる。

④ 2段目の石壁と目される石群帶は、石壠Ⅰ区と比べた場合、石数が著しく劣る。石群の帶は北東端（Q点）では、斜距離で1m幅に過ぎず、S点でも2.1m幅に止まっている。

f石は、石群の最下部に位置する巨石で、積み土にしっかりと食い込んでいる。長さ1.35m、計測できた厚みは30cm。これも石壁の積み石としては、どうかと思える形状をしている。むしろ、2段目・石壁の根石の様である。

石壠Ⅲ区（石列E・石列F）

① 石壠Ⅱ区の西端から6.0m先に存在する石壠である。この間に石壠は存在しない。石列Eは石壠内側の石壁で長さ9m。これに対比する石壠外側の石列は、大部分が欠損状態にある。石列Eで、石列A・Bと同様に根石状の大石が並んでいる。ただし、石列Eに限っては、大石の下部に太めの角礫が、真の根石として敷かれているのが特色である。石列Eの走行は、全体的に内側へやや振れている。これは、地形の影響を受けているからである。

② 石列Fは、長さ2.5m分しか残存していない。土壠の上面幅は1.5m。これは両側面の石壁を含めた幅である。上面には角礫がびっしりと詰まっている。石壠Ⅰ区の上位で見られる角礫群を比較した場合、ふた回り以上の大きさである。積み石が崩れ落ちて、積み重なっているのかも知れない。

③ 西南西側の石壠端部は崩れ落ちている。さらに、2段目の石壁と目される斜面部の石群帶も存在しない。自然現象による崩壊か、作為的な破壊であるかは、明確でない。

虎口箇所

① 調査の際に、我々が使用している登山道は、^{かみかい}上囲地区からのものである。元来は八方ヶ岳・登山道の枝道で実に自然なルートである。無理なく谷部と山腹を登っている。これも、中満宣道氏の言であるが、かつて城跡地には草が繁茂しており、家畜の飼料採集場であったと言う。刈り草を満載した牛馬が、この山道を下ったという。この山道は明らかに登城道を転用したものである。そうでなければ、城跡から最も近い上囲地区や下囲地区の存在理由がなくなってしまう。両地区は、米の山城に直結した小集落で、守備兵の居住地や食糧の供給地であったと考えられる。

② 現在の登山道は、最終的にG地点で石壘を横切っている。当初は、ここが虎口ではないかと推論した。この地点は、石壘Ⅰ区とⅡ区の境目にあたっていたからである。さらに、この箇所では、石壘が外側から大きく抉られ、長さ2.3mに限っては、石列が欠損していたからである。

しかし、石壘内側の石列は、根石が一石も欠けることなく続いていることが判明した。登山道はG地点において、廃城後に石壘を断ち切ったものに過ぎなかった。

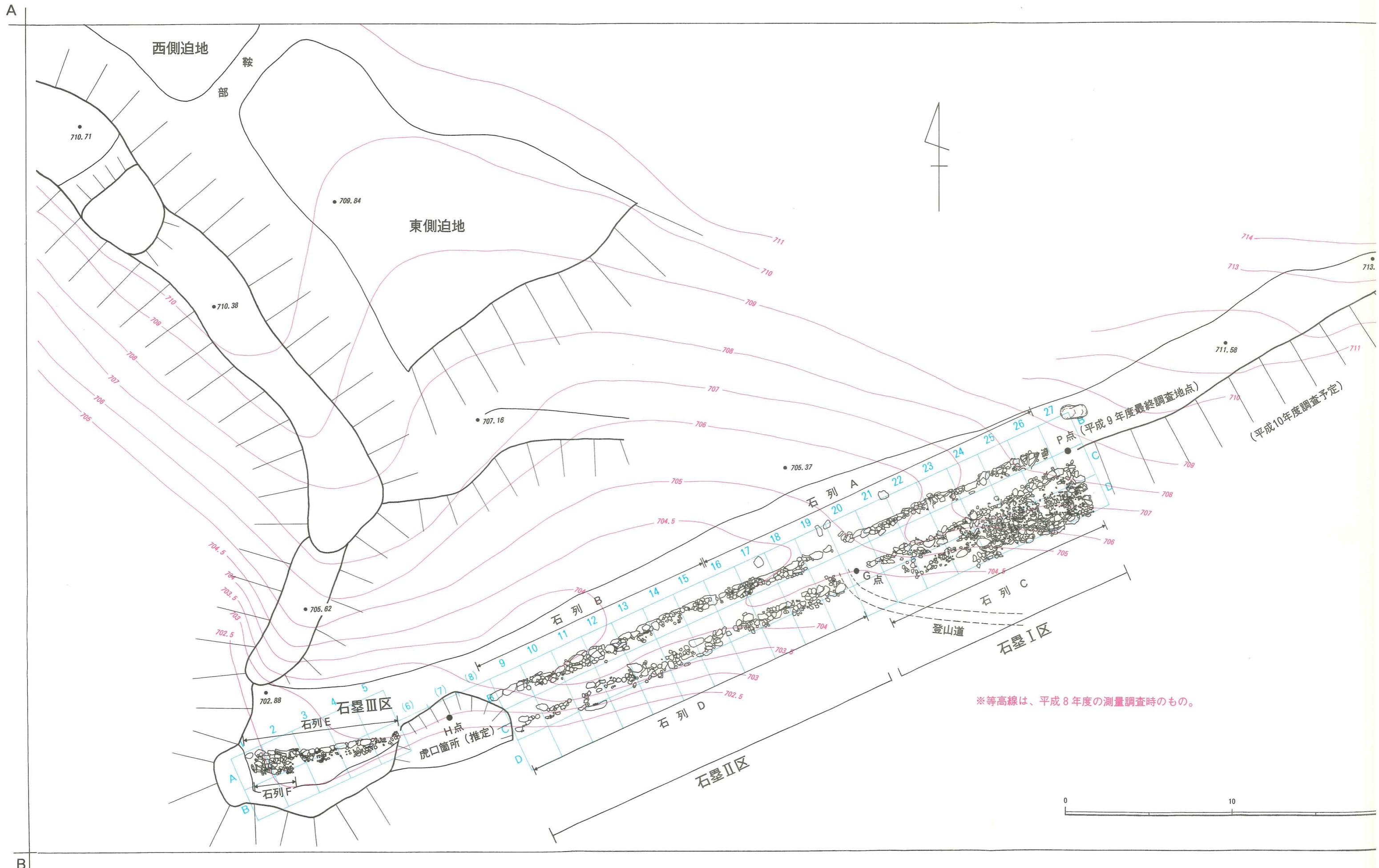
③ 新たに虎口箇所を捜すと、H地点が目に止まった。ここは、石壘の途切れる箇所で、長さ6.0m分が広く開いた状態にある。石壘の崩壊箇所と考えていたが、実際の所、ここが、虎口箇所ではないかということになった。石壘Ⅱ区のd石・e石が角石であることも理解できる。そこで、この箇所を調査した。結果として、全体が窪地であることは判明したが、石段などの遺構は検出されなかった。その理由として、虎口そのものは、石壘の開口部にあたり、雨天時に水道(みずみち)になることがあげられる。特にH地点の場合、地形的にも、傾斜地の末端部にあたり、雨水はここへ集中的に流れ込むことになる。虎口遺構が崩壊しやすい状況下にあったことは確かである。これを証明するかの様に、石壘Ⅲ区の東端は大きく崩れている。

石壘下の登城道

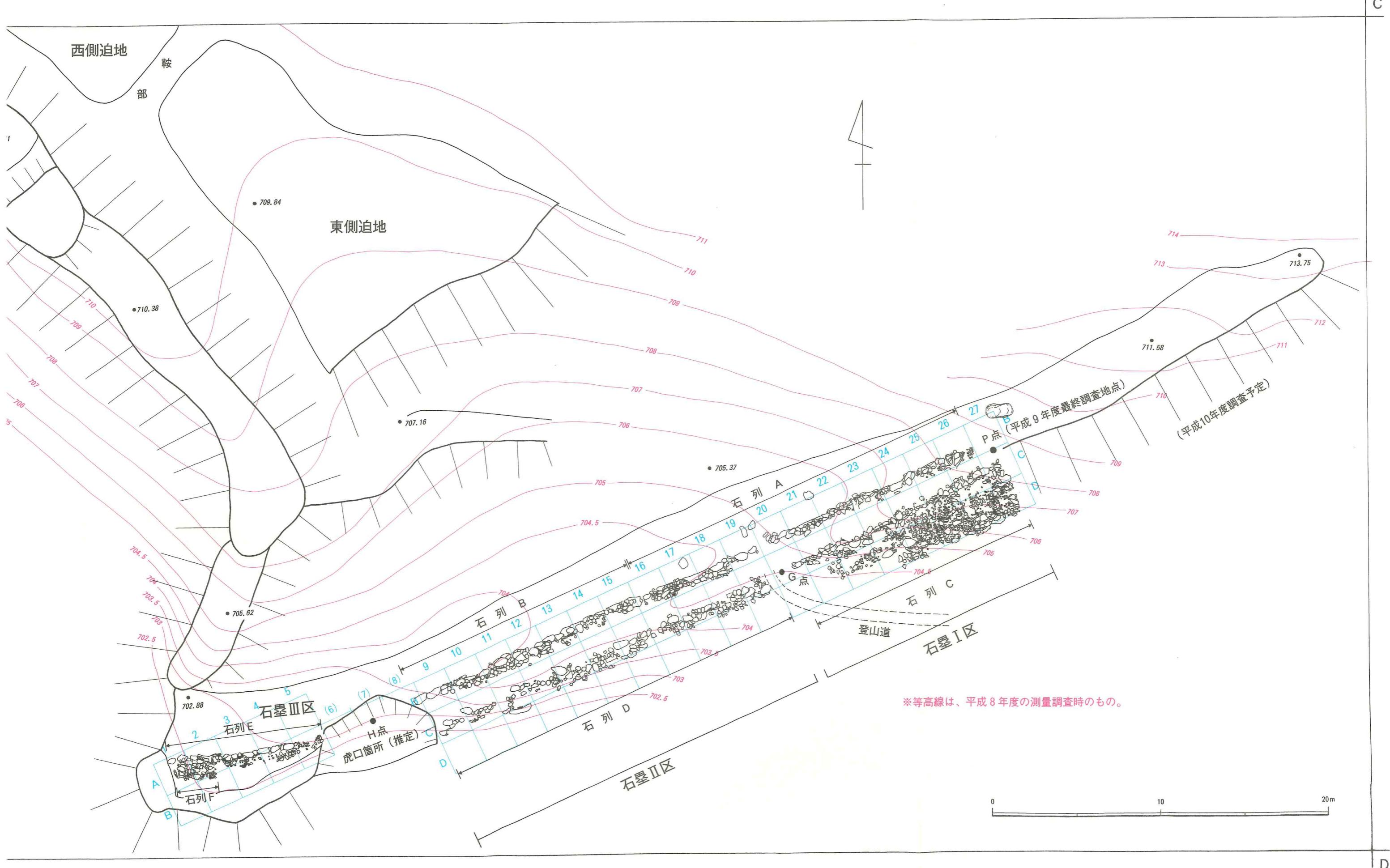
H地点を虎口とするならば、石壘Ⅱ区の裾部に登城道が存在するはずである。現況では伺い知れないが、斜面部に埋没している可能性もあるので、次年度に調査を実施する予定である。

その他

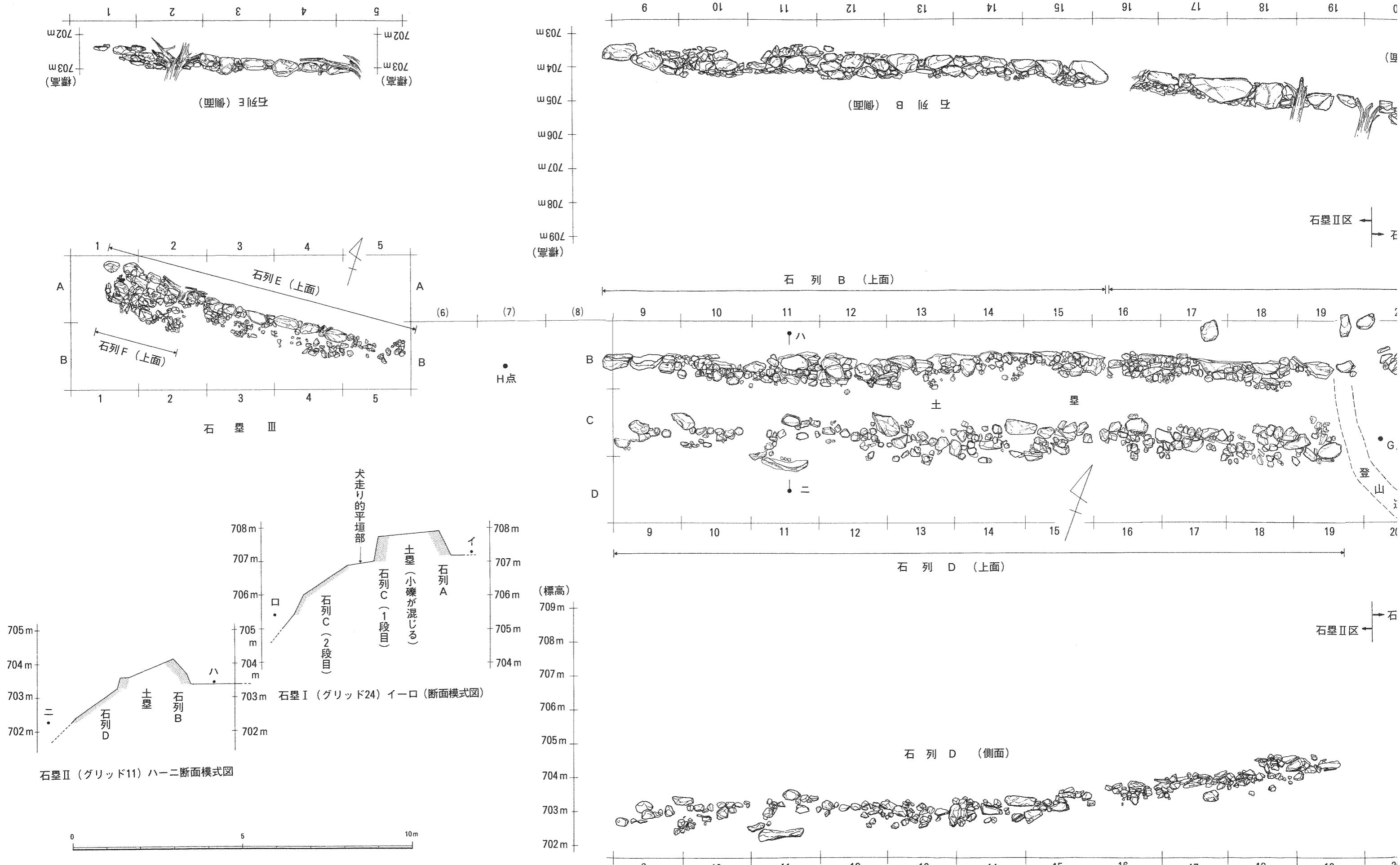
城跡地は、戦前までは一面の草山であった。当然のことながら、中満二人氏の言によれば、山頂からの眺望は絶景であったという。現在は、全山が^{ひのき}檜の植林地となっているが、植林されたのは、戦後まもない頃である。山城の在り方を考える時、実に興味深い事例である。今日、山城は、その多くが雑木の繁る所になっている。しかし、当時は、周辺一帯の雑木が伐採され、城地がむき出しの状態になっていたはずである。そうでなければ、敵に城地の存在を知らしめることが出来ず、山頂からの眺望も不可能なものとなってしまう。米の山城跡の場合、このことを証明できる貴重な事例である。さらに廃城後、400年以上も「はげ山」の状態が続いたことも注目される。廃城後、程なく、むき出しの地形を生かして、牛馬の飼料場としての利用が始まったことがわかる。幾度となく、この山に登ったが、極めてインパクトのある事柄だったので、文末に記した。



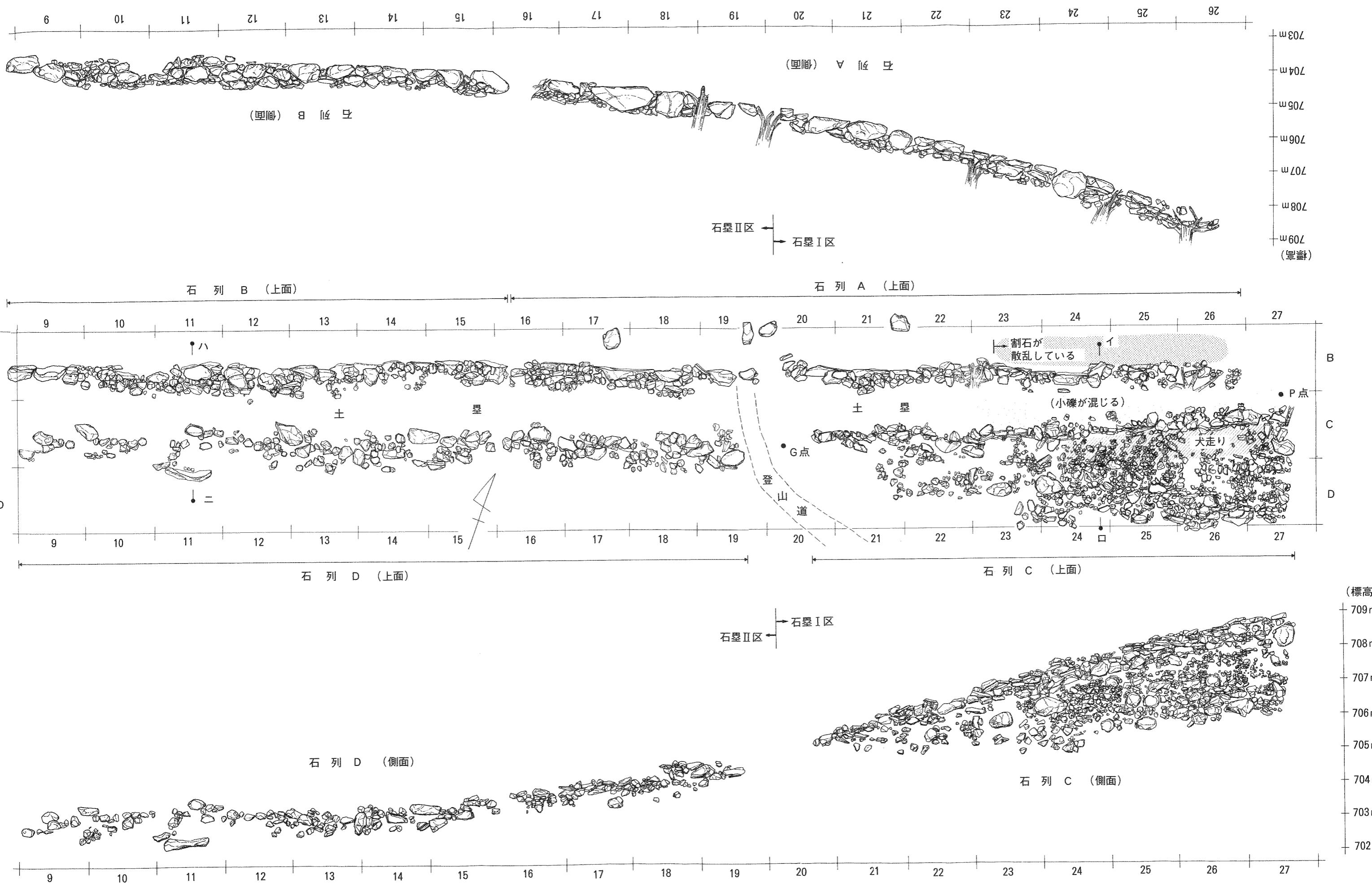
第7図 南西南山腹区域図

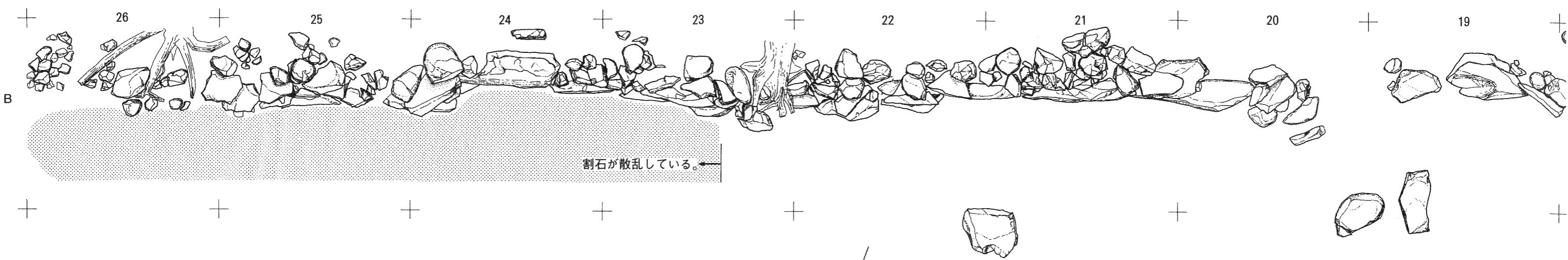


第7図 南西南山腹区域図

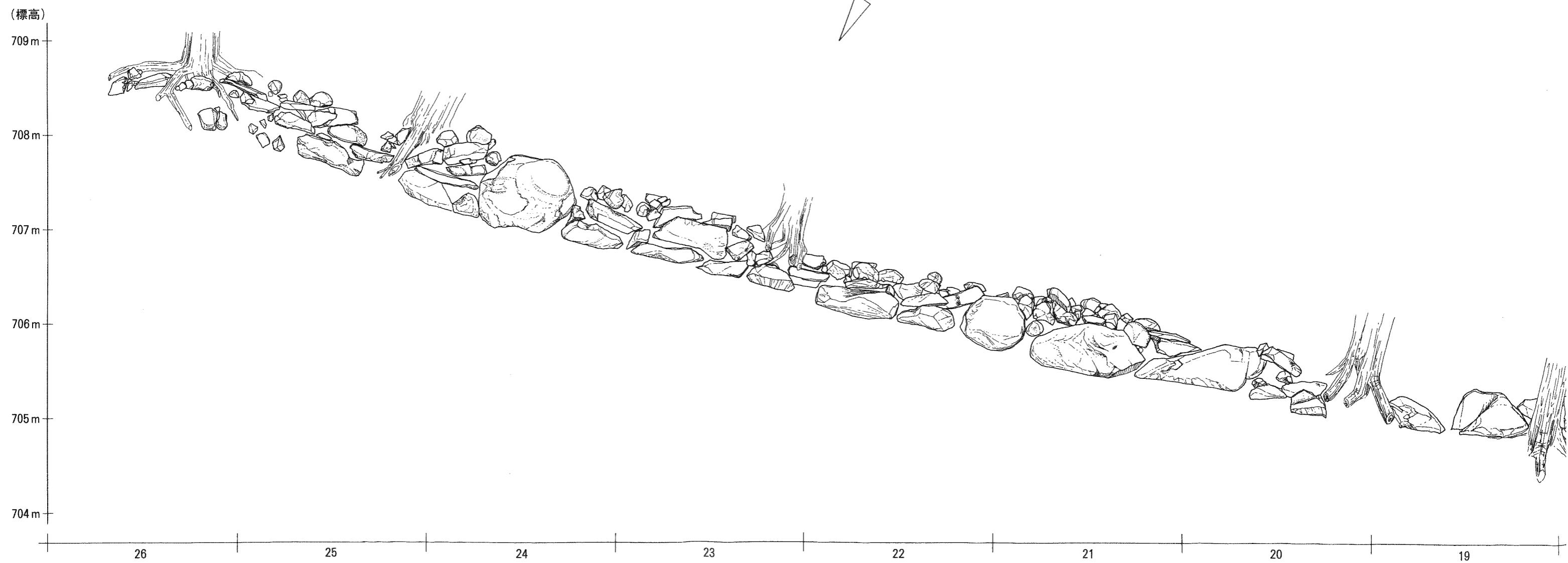


第8図 検出石墨全体実測図およびグリッド設定図

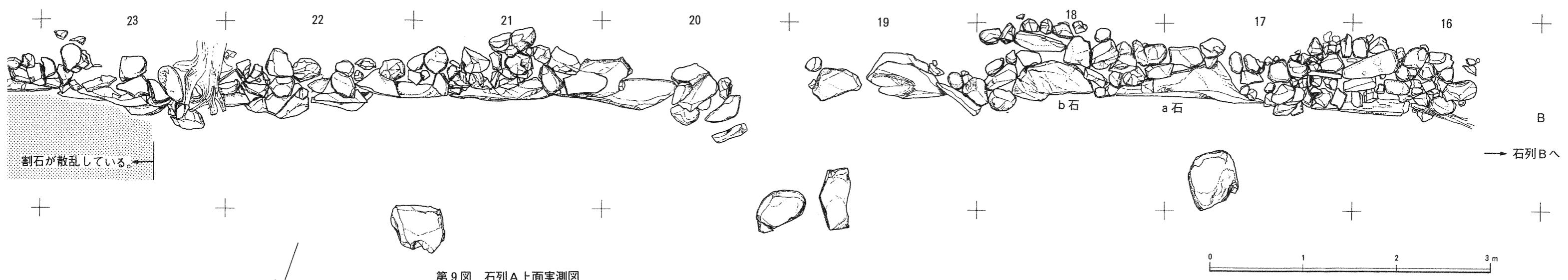




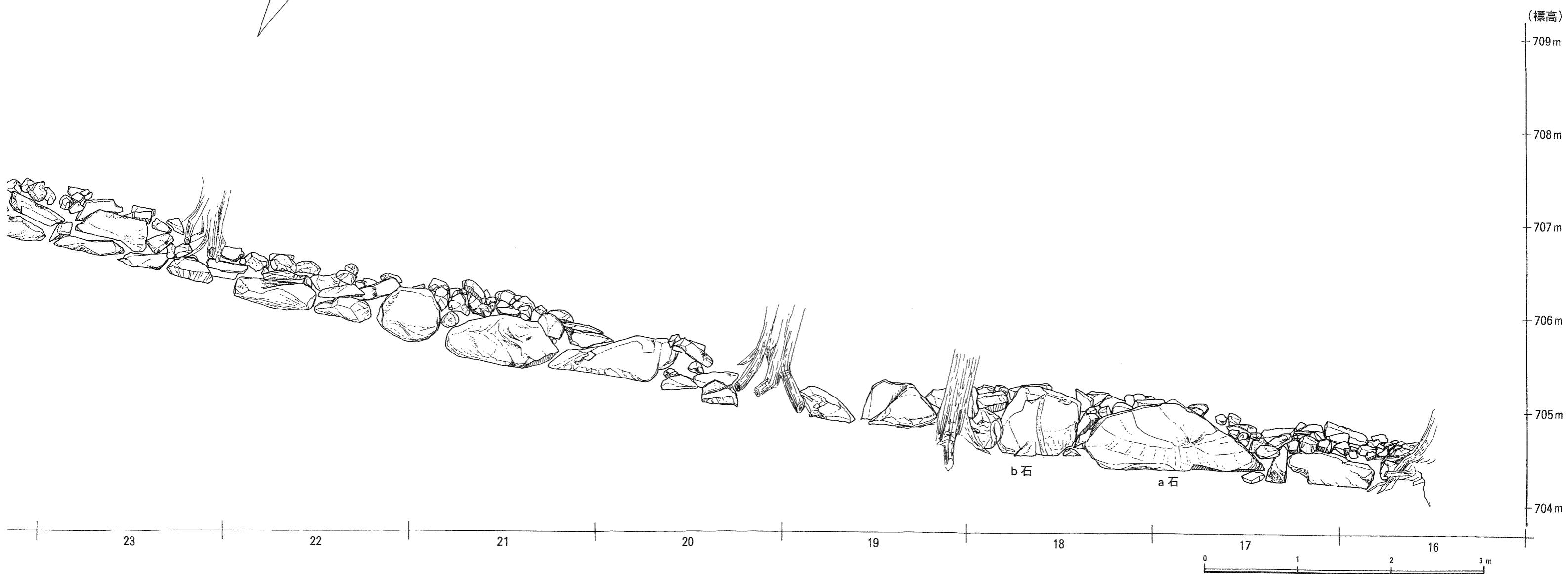
第9図 石列A上面実測図



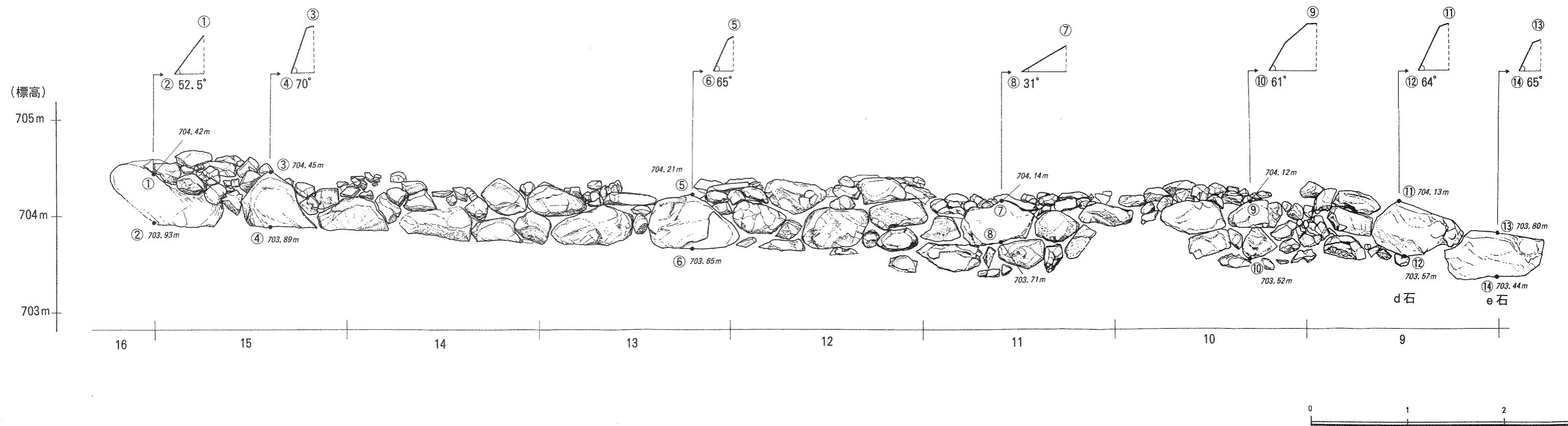
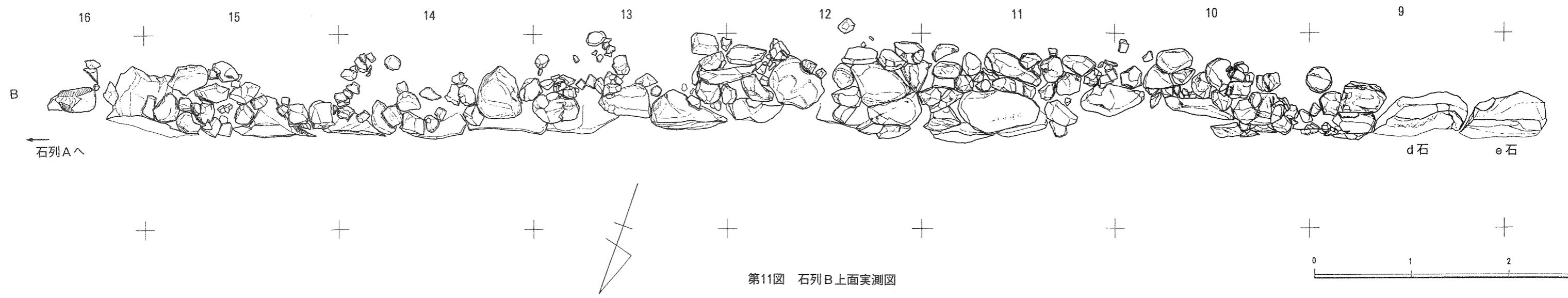
第10図 石列A側面実測図

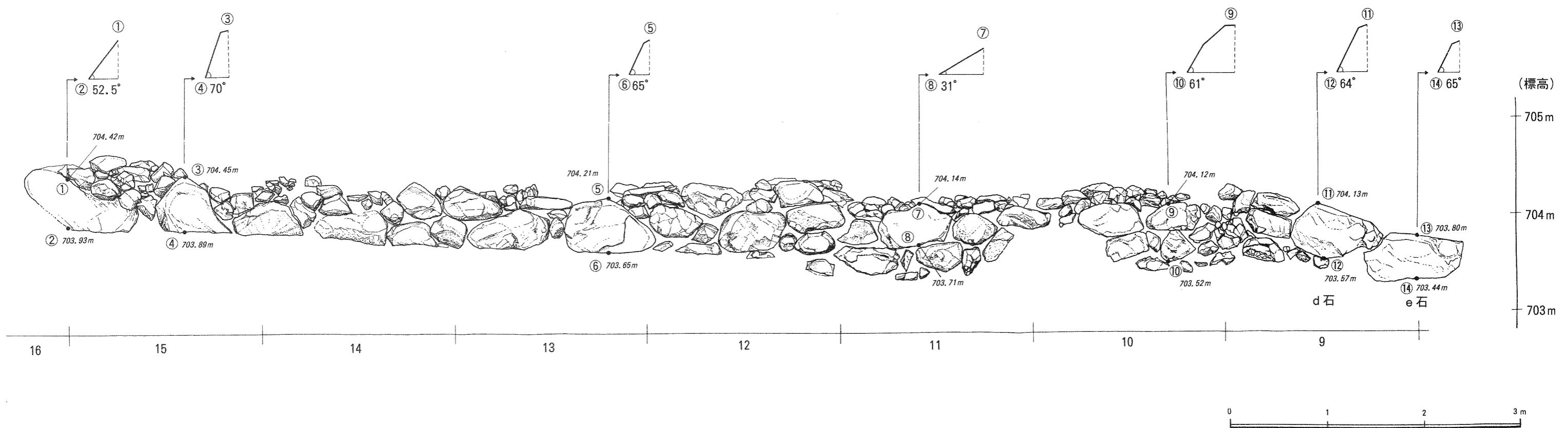
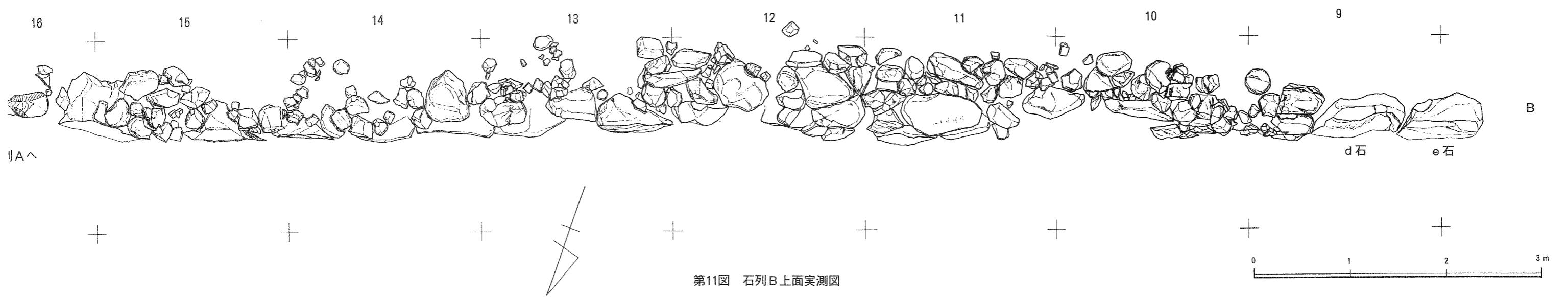


第9図 石列A上面実測図

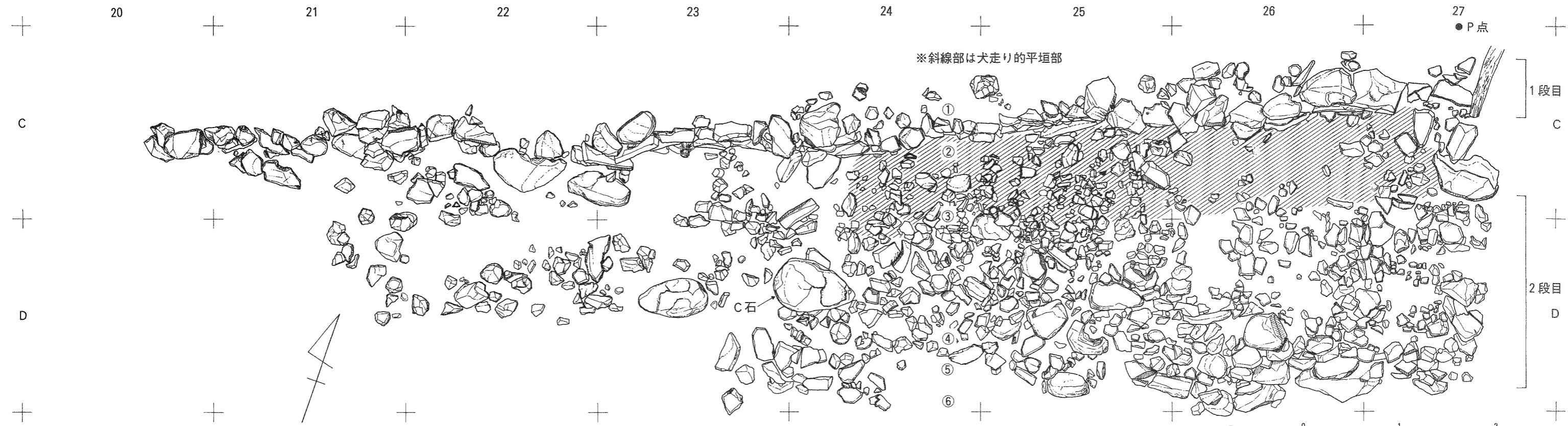


第10図 石列A側面実測図

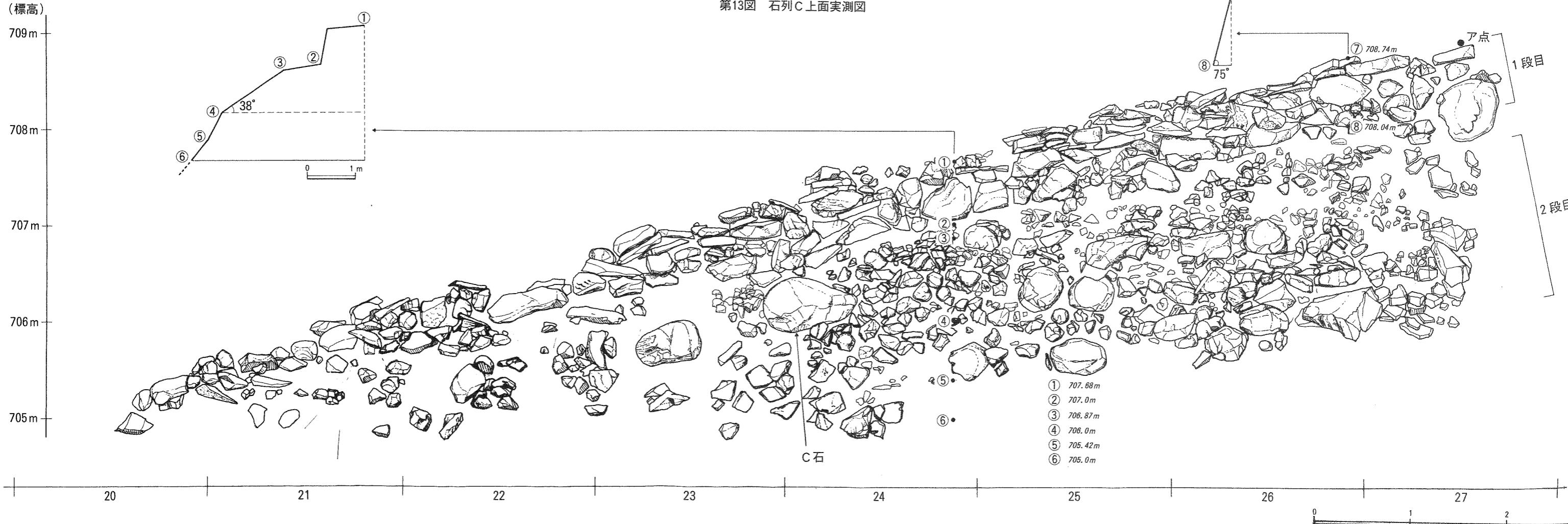




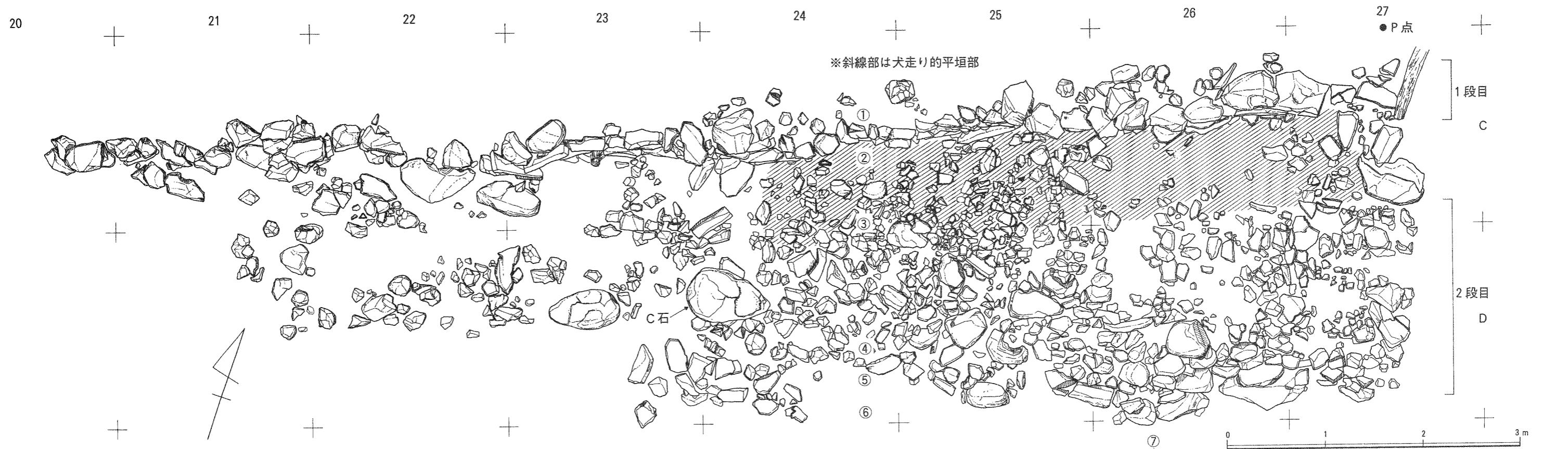
第12図 石列B側面実測図



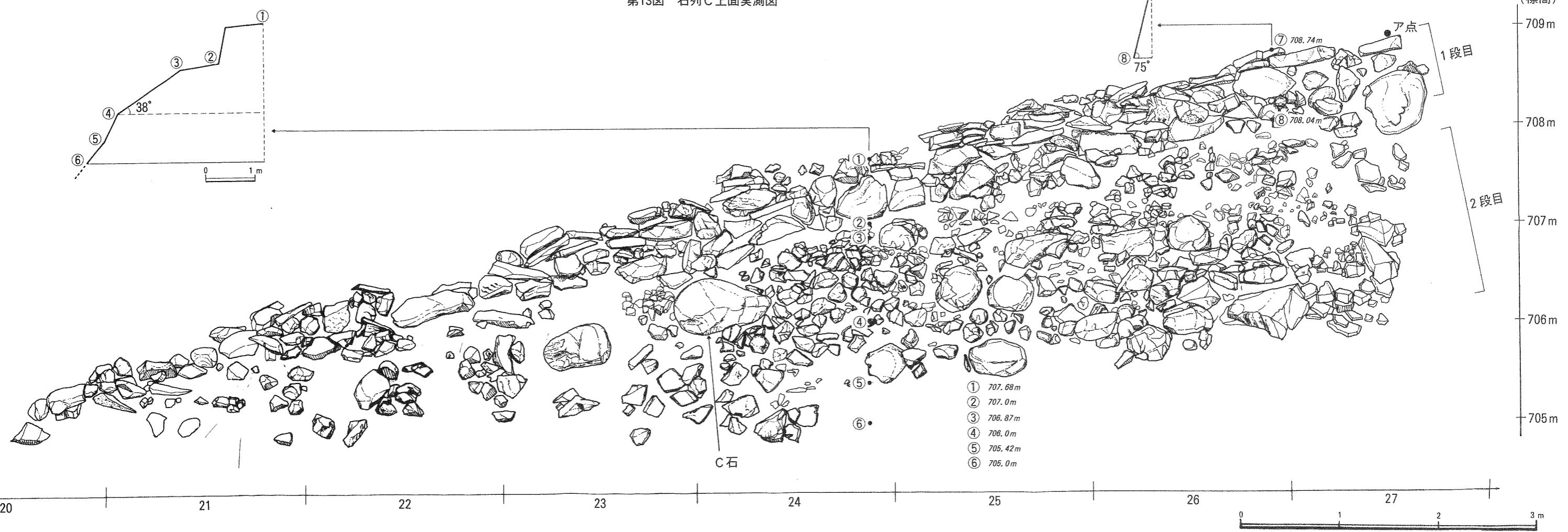
第13図 石列C上面実測図



第14図 石列C側面実測図



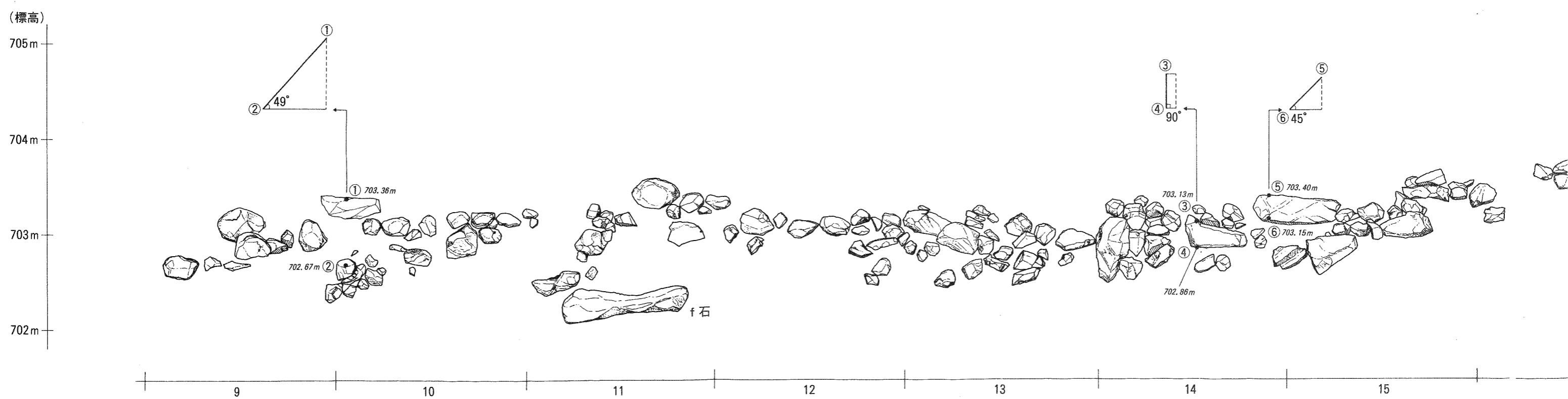
第13図 石列C上面実測図



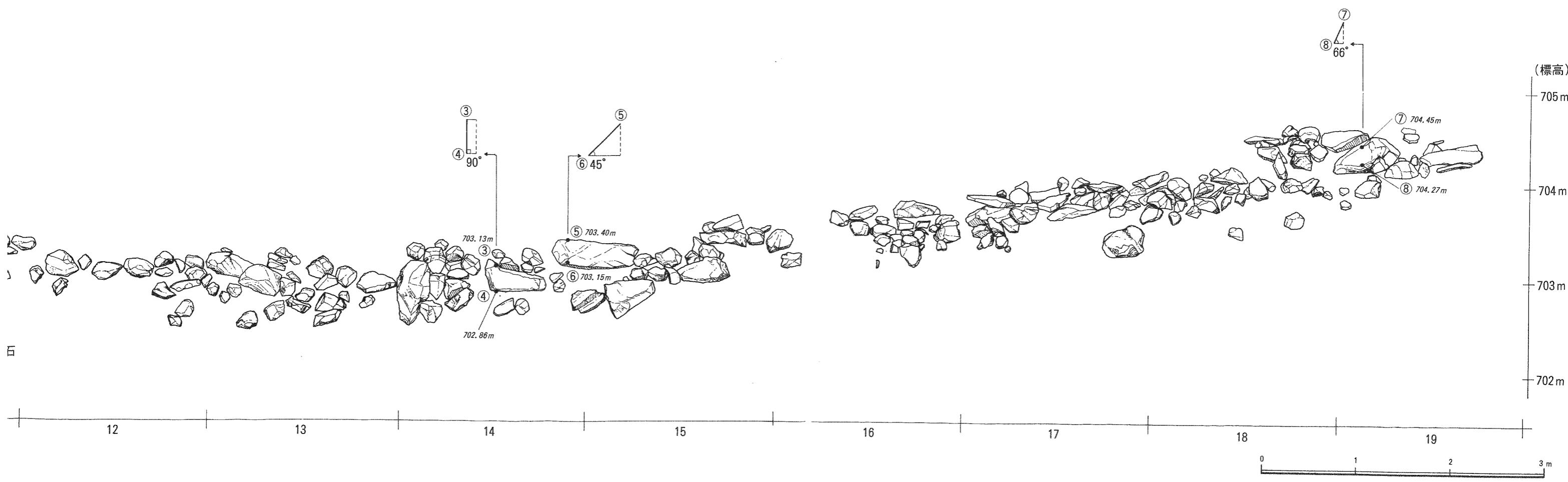
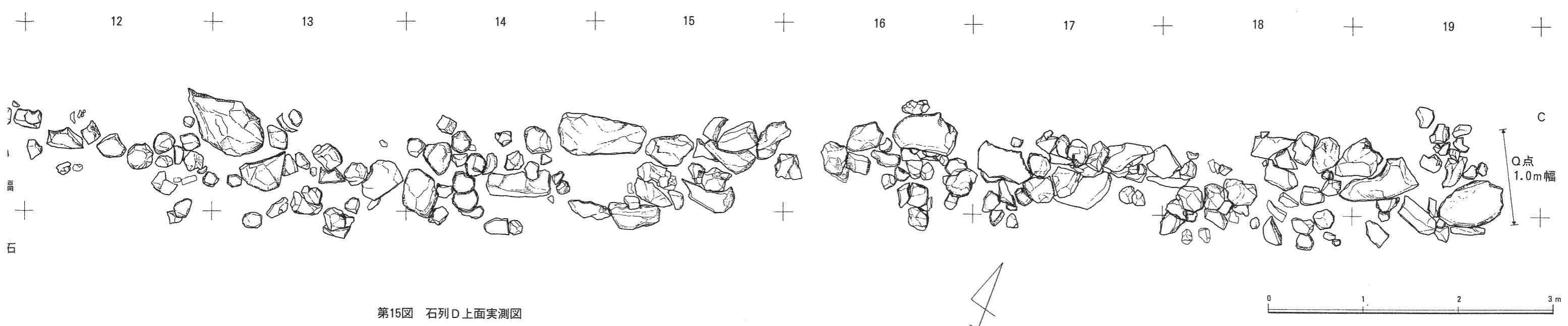
第14図 石列C側面実測図

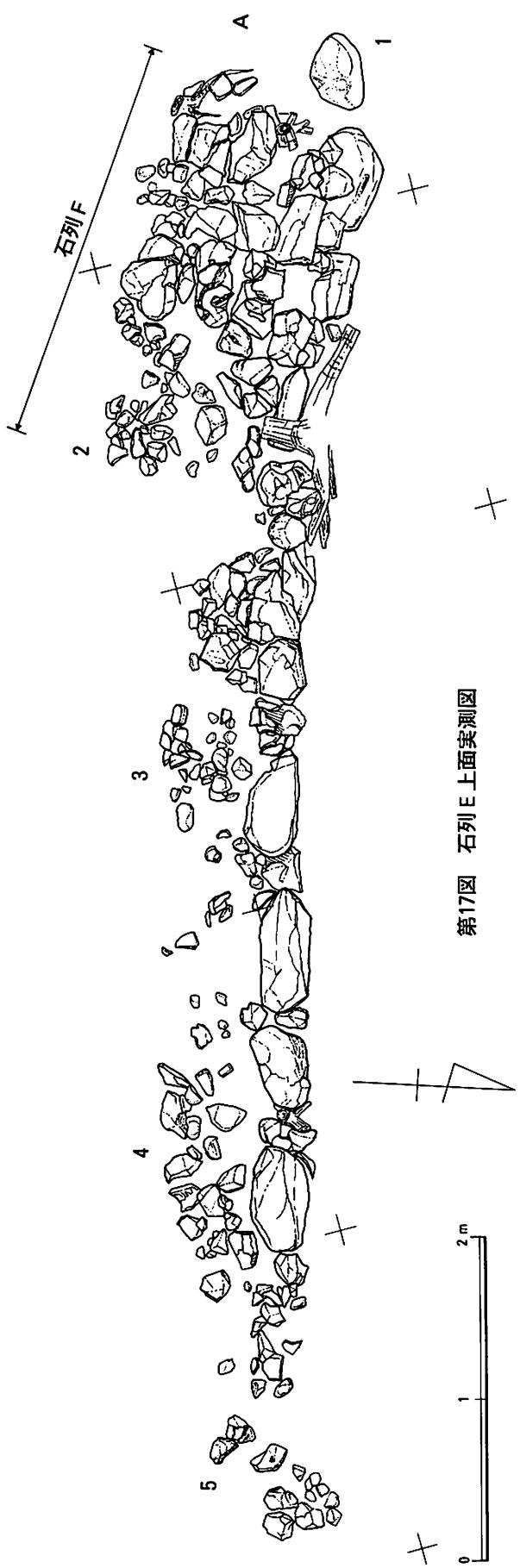


第15図 石列D 上面実測図

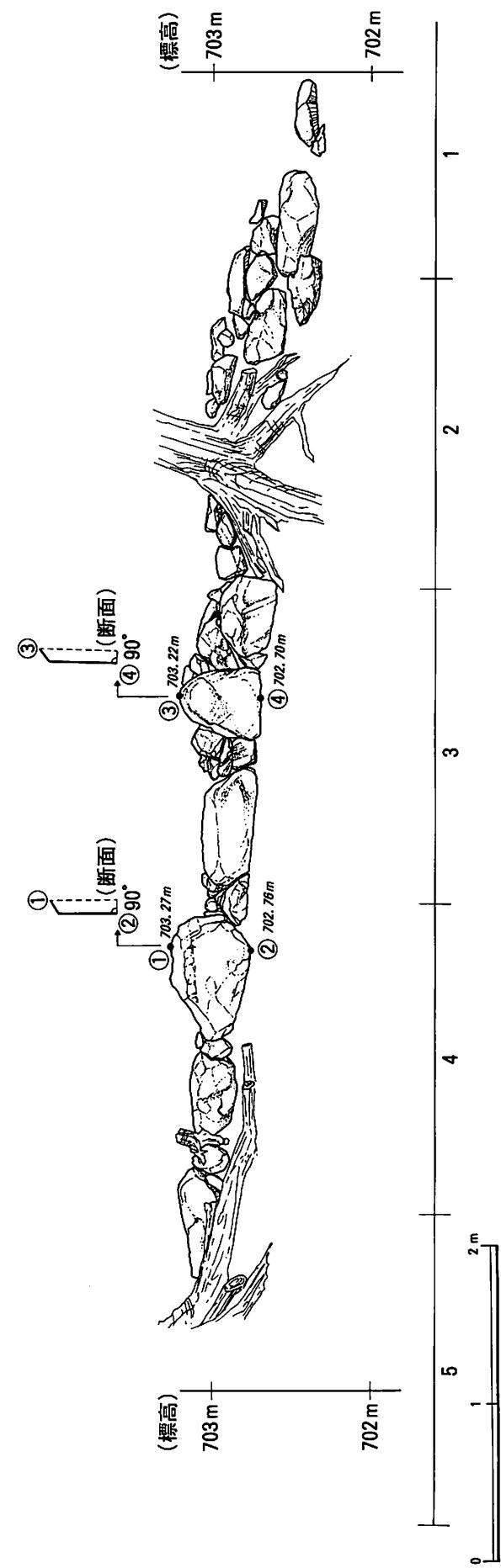


第16図 石列D 側面実測図





第17図 石列E上面実測図



第18図 石列E側面実測図

第Ⅳ章 ま と め

① 石壘 I～III区は、2段構えの「野面積み」石壘である。積み石は自然石の大石で、グリ石は割石の角礫である。切り石が一切、使用されていないところに大きな特色がある。

出土遺物は、高台付の土師碗1点のみで、遺物による石壘の時代判定は不可能に近い。ちなみに土師碗だけから推論すれば、平安時代末期の石壘の可能性もある。しかし、調査区は、中世・山城跡としての純然たる縄張りの中にあり、隈部館も石造り遺跡であるところから、総合的に判断して、隈部氏時代の石壘と見なされる。

② 総じて、土壘・内側の石列は、大石を根石とした土留め的なものである。上部には、角礫の割石を積み上げているが、近世城郭・石垣の天端石とは、全く性格を異にする。

土壘・外側の石壁は、2段に分かれている。1段目は石壘 I 区から検出できたが、石壘 II 区・III 区では崩壊していた。土壘・内側の石列に対比するもので、根石の上に、奥行きのある偏平な割石が、じかに積み上げられていた。2段目の石壘は、やや緩斜の斜面部から検出されたものである。ただし、崩壊が進んでいるので、石壘の構造がわからない。真実、石壘 I 区の石群帶は、角礫の大半がグリ石と思われるが、積み石の実態がはっきりしない。特に、それらしき大石は、形状が歪で、積み上げに耐えられる「しろもの」ではない。それにも増して、積み石の絶対量が不足している。正直なところ、これらは根石の可能性が大きい。極論であるが、歪な大石を根石として、グリ石と見られる割石が土壘の斜面部に貼り付けられていたとも考えられる。

③ 石壘は、敵方を威脅するため、「張り子の虎」的なものと解釈される。しかし、米の山城跡は、標高755m強に及ぶ高山であり、仮に大規模に構築した場合でも、外側の石壁が、果たして麓から見えるのかという疑問が残る。実際のところ、町役場から660m強、麓の横尾地区から490m強、最も上域の上囲地区からでさえも380m強の比高が生じている。ところが、石壘は1段目と2段目とを合わせても、2.5～4.0m幅(斜距離)に留まっており、1段目の石壁の長さにしても、今年度に計測した分で53m、これに次年度調査分の22mを加えたとして、総延長75mにすぎない。おそらく、遠くから眺めた場合、石壘の長さはともかくとして、幅に至っては、点にしか見えないだろう。近くの高山で土砂崩れをおこしている箇所も、地山肌が縦線としてわずかに確認できる程度である。

④ 米の山城跡の存在理由も問題である。常識的には、伝えの城である以外に、隈部館の詰めの城として考えるべきであろう。さらに、逃げ込みの城の性格を合わせ持っていたと思われる。隈部館～猿返城～米の山城を結ぶ中世の尾根道は、このことを歴然に物語っている。しかし、猿返城跡～米の山城跡間でさえ、優に1時間半を越える踏破時間となる。館から余りに離れ過ぎていることは否めない。それ程の奥地に、何故、城を築き、土壘と石壘を構築する必要があったのかという謎は依然として残る。このことに加えてさらに、米の山城の維持管理のためには、それ専用の上囲地区の存在が不可欠であったことは、言うまでもないことである。^{かみかこい}下囲地区と合わせて、米の山城の築城と同時期に、村が開かれたのであろう。両地区は、純然たる軍事村と見なされる。

⑤ 山城には、「山容」が必要であったと思われる。城地を選択する時、山の形も選考の基準となった様である。実際、山城は、どこから眺めても目立つ地形をしており、独特の雰囲気がある。確かに、米の山城跡も、お碗を伏せたような山容で、見る方角によっては、遠目にも非常に目立つ。連山の東端に位置するだけに、尚更である。但し、米の山城跡に限っては、3つの問題点がある。1つ目は、背後に控える雄山・「八方ヶ岳」の存在である。見る方向によって、八方ヶ岳の山裾と城山が重なり合い、山影が吸収される場合がある。その際、城山は非常に見えにくくなる。2つ目は、上永野地区（城跡の所在地）のある方向からは八潮山と

城山が重なり合って、山と城山が重なり合って、この場合も、山影が吸収されることになる。3つ目は、隈部館麓の桑原地区付近まで接近すると城山が完全に隠れてしまい、存在すら不確かなものとなる。猿返城跡が常に視界に入るのとは、好対照である。敵方に城地の存在を知らしめ、同時に威圧感を与える点においては、大きなマイナス要因である。米の山城跡が、単なる「伝えの城」に止まらないだけに、尚更である。

⑥ 城は、本来、攻撃型のものではなく、守備型である。非常時に、逃げ込むための施設で、この基本概念は、古代山城から中世城へ引き継がれている。したがって、敵方が城内に攻め入った場合は、最終局面である。主たる戦いは、麓集落で展開しなければならない。

隈部館を敵方が攻めた場合を仮定する。その場合、先ず、上永野地区に陣を敷くが、それが打ち破られた時に、山腹の館まで後退し、それでもだめな場合は、猿返城を経由して米の山城へ逃げ込むことになる。しかし、そこまで戦局が悪化した時に、果たして、米の山城で、最後の一戦を交えるだけの余力が残っているのか、甚だ疑問と言わざるを得ない。実際、隈部館に攻め込まれた時点で、落城したのも同然であろう。最終地の米の山城に、何故、多くの縄張りがなされたのか、大きな疑問として残る。

⑦ 最後に、米の山城の南側山腹に築造された石壘と石壁についてのまとめを行う。石壁の向きは、明らかに、上永野地区を意識したものである。しかし、先に述べた様に、城山は、方角によって隠れたり霞んだりするので、遠目での「張り子の虎」としての石壁の効果は十分でないことがわかる。次ぎに猿返城から尾根道伝いに、米の山城へ逃げ込んだ場合、敵方も同じルートで進行してくるはずである。わざわざ谷道伝いに、南西麓の上郷地区へ迂回することは考えられない。そうすると敵方が石壁を間近に望んで、威圧を感じる機会はないという事になる。総じて「中世城としての石壁の必要性は見い出せない」と言わざるを得ない。

なお、古代山城の鞠智城跡との関連性については両遺跡間に余りの距離的な隔たりがあるので、どうかとは思う。車でさえ、20分近くの所要時間が必要である。ただし、一片とは言え平安時代末の「高台付き土師碗」が出土しているのは、まぎれもない事実である。米の山城が、古代山城の転用だとする見方も、残しておくべきであろう。

近世・近代の文献に見る「米の山城跡」

「山鹿郡中村郷地誌調」「第六大区六小区 上永野村」

「古城考」

山鹿由来記に、宇野七郎親徳築之と云々、隈部式部太輔親廣、米の山鶴巣に館を築て居之云々、土俗の説に、隈部親廣在城の時、鳴津兵士來て攻之、城中水乏し、薩兵是を知て、敢て急に不攻、故城兵殆んど困苦す、親廣謀て、城外より見ゆる高場の所にて、旦暮白米をもつて馬を洗ふ事夥し、寄手数日見之、城内兵糧多く、旦つ水の手多き事案外也、中々急に攻ても難陥かる城に、日數を重て無益とて、人數班せし故、米の山の城と稱すと云、

「肥後國誌」

卷之七 山鹿郡 中村手水に記載されている。「古城考」と同一内容で、隈部式部太輔親廣につき、「親永の誤りか」との但し書きがある。さらに、文末に「府より行程八里也」と、書き添えられている。

「国郡一統志」 「米山城」との記載のみ。

「古城主考」

猿返古城 山鹿郡

猿返城跡ハ上永野村辺に有城主隈部但馬守親永と旧記に有城地險阻なり

米山古城 山鹿郡

米山の古城も上永野村の邊に有城主隈部親永と云傳へたり險要成る城地なり

下水野

鶴巣古城 山鹿郡

隈部家臣在城哉

「肥後國山鹿郡村誌」

膳鼻山ノ東ニアリ 高山ニ拠ル絶頂平地長二十一間横五間 南方下ルコト四十間甚
險也其下東西堀丁南北三十間平坦外断崖岸ナリ 城門ハ坤ニ面ス 城域東西二十二
間南北八間高四百間 古記集覽鶴池旧記 隈部式部太輔治城主タリ 専立寺旧記ニ永野城主
トアリ永野城ト云ルハ當城ナラン 其孫親広ニ至リ薩軍攻之城中水乏シ 親広乃チ高丘
ニ於ア旦暮精米ヲ以馬ヲ洗フ 薩軍望テ城中水多シト囲ヲ解テ班ル 因テ米山城ト
称ス 肥後志土俗記 暈靡年月不分明

膳鼻ノ東ニアリ高山也 絶頂ニ長二十一間横五間計ノ平地アリ 下ルコト四十間甚
峻也此下ニ平地アリ 長六十間横三十間ハカリ也 東ニ切岸ニ重西ニ切岸ニ重アリ

南北ハ甚峻也 西ト南ニ城戸堀切岸アリ 城戸ノ内周廻五町程也 二ノ城戸堀切
アリ 地志略ニ曰ク米山城跡ハ上長野辺ニあり 宇野親治力築く処也 古城考ニハ
城主隈部親永トアリ 専立寺記ニハ隈部式部太輔親広米山鶴巣ニ住ストアリ事蹟考
ニ曰ク大友興廢記ニ曰ク天文二年大友義鎮肥後に發行して隈部弥三郎力籠たる八方
嶽の城を陥すとあり 八方嶽城ト云ハ米山ナランカ村民伝テ曰米山城ヲ攻ラル、時
米ヲ以テ馬ヲ洗フ敵見テ謂ラク此高山ニ水沢山ナリ攻落スコト難シトテ引返ス故ニ
米山ト云ト云リ

隈部物語

「肥後古記集覽」(県立図書館蔵)に収録されている「隈部物語」は、工藤敬一氏によつて全文が翻刻され、「隈部氏関係資料集」(「菊鹿町史」資料編補遺第一集・平成九年三月)に収録されている。ちなみに、本報告書に掲載したものは、菊鹿町下内田にお住まいの小澄正四氏宅に、代々、伝わってきた「隈部物語」である。

冒頭には「隈部物語」との標題が
ついている。「隈部氏関係資料集」に
収録のものと比べると、はるかに短
編である。内容も、隈部氏が関係し
た国衆一揆の時の「城村城合戦」に
絞つたもので、一揆後の処分に触れ
て終わっている。

隈部物語

肥後國不治候及二太閤様一家ニ降參させ御帰
肥後之熊本ニ御入被成國侍被召出本知御朱印
被下げる其内隈部但馬守親永には山本山鹿
菊池三郡ニ而八百町之本知無相連御朱印を
被下げる當國守護之為ニ
とて佐々陸奥守と云

人を熊本ニ召居太閤様
御上落を被成ける其年ハ
天正十五年之事也然者
其年之七月ニ隈部殿熊
本ニ御出被成ける処ニ佐々
木奥守殿より隈部本知
八百町ニ検地を入而可相渡
と有けるを隈部其後
成間敷由被申入其保隈
府の城に帰城を堅
籠ける然處に陸奥守ハ
天正十五年七月廿四日夜
六千余騎にて隈府之
城に押寄ける然ニ隈部殿の
子息隈部式部之大輔
親安と申者山鹿之城村之
城に居住有ける隈府ニ
馴行父親永殿之御前ニ
申けるハ此城ハ物よわし
某が山鹿の城村ニ御越
有て御籠被成敵を
待受某諸共ニ打死可
申上候山鹿の城村之城に
御移被成城ニ籠給ひ
ける

弓百張の頭ニハ	有動掃部守
西之外かたニ弓五拾丁頭	有動大膳守
保柳口鐵炮六十丁頭ニハ	有動左京守
弓七拾丁部原澄宅	有動能登守
船尾口二鐵炮六拾丁頭	有動伯耆守
有動駿河守	有越前守
弓三拾張頭	鉄炮七拾丁之頭ニハ
有動藏人	有動伯耆守
妙見口鐵砲六拾丁頭	有動駿河守
有動太門	弓百張之頭
有動帶刀守	圓通寺口二八
大將隈部五郎兵衛	大將隈部五郎兵衛
関部玄蕃守	関部玄蕃守
鉄炮百三拾丁頭	鉄炮百三拾丁頭
関佐渡守	関佐渡守
同隼人守	同隼人守
弓五拾張ニハ	弓五拾張ニハ
小澄將監上科備後守	小澄將監上科備後守
浮武者之頭ニハ	浮武者之頭ニハ
有動孫市	有動孫市
同又七也	同又七也
鐵炮百丁弓百張	鐵炮百丁弓百張
惣物頭ニハ	惣物頭ニハ
有動大隅守兼元也	有動大隅守兼元也
如斯所々口々を堅め防ぎ	如斯所々口々を堅め防ぎ
ければ佐々殿何々せめ給申	ければ佐々殿何々せめ給申

共落さりける此道ニ佐々殿より
筑後柳川立花殿ニ加勢
を与給ふゆへに立花殿より
三千騎被遣ける城村之城に
押寄責けれ其城つよき
ゆへ柳川勢ハ柳川として
引取ける其後陸奥守殿
色々軍法を廻し給ふニ
天正十五年十二月二日ニ太閤
様此由を聞召安國寺と申
侍を被遣は扱ひになりて
何事なしに成て隈部一門
下城仕給ひける明年隈
部一家を呼登被成けるが
隈部但馬守親永と二男
親房ハ柳川にて切腹被仰付
ける其外隈部親安同重安
有勁大隅守有勁甲斐守有勁
能登守有勁志摩守北里
与三兵衛此等之人ニ豊前ニ
小倉三而皆こと／＼く切腹被
仰付ける掇夫より当國所々之
領主を居工被成ける山鹿城村之
城ニ蜂須加阿波守内牧ニハ
毛利壹岐守
三舟には
黒田官兵衛
熊本には
浅野弾正
字土二八
八代二八
加藤虎之助
福嶋左右衛門殿
御下し被成國おさめ
給ひける以上

文献に見る「城村の城」合戦で使用された武器の数

		小澄氏所有		隈部氏関係資料集収蔵					
文献名		隈部物語		隈部物語		城村守戦記		隈部軍記	
武器名 使用場所	鉄砲	弓	鉄砲	弓	鉄砲	弓	鉄砲	弓	
原口（尾口）		100	180	100	180	100	70	50	
西の舛（升）形	70	50	70	50	70	50			
保柳口	60	70	50	70	150	70	100	70	
船尾口（尾口）	60	30	60	35	60	35	60	35	
出丸・妙見口	60	100	150	100	150	100	150	100	
円通寺	130	50	120	50	120	50	120	50	

第4表 文献別武器対数表

[付記]隈部氏関係資料解題

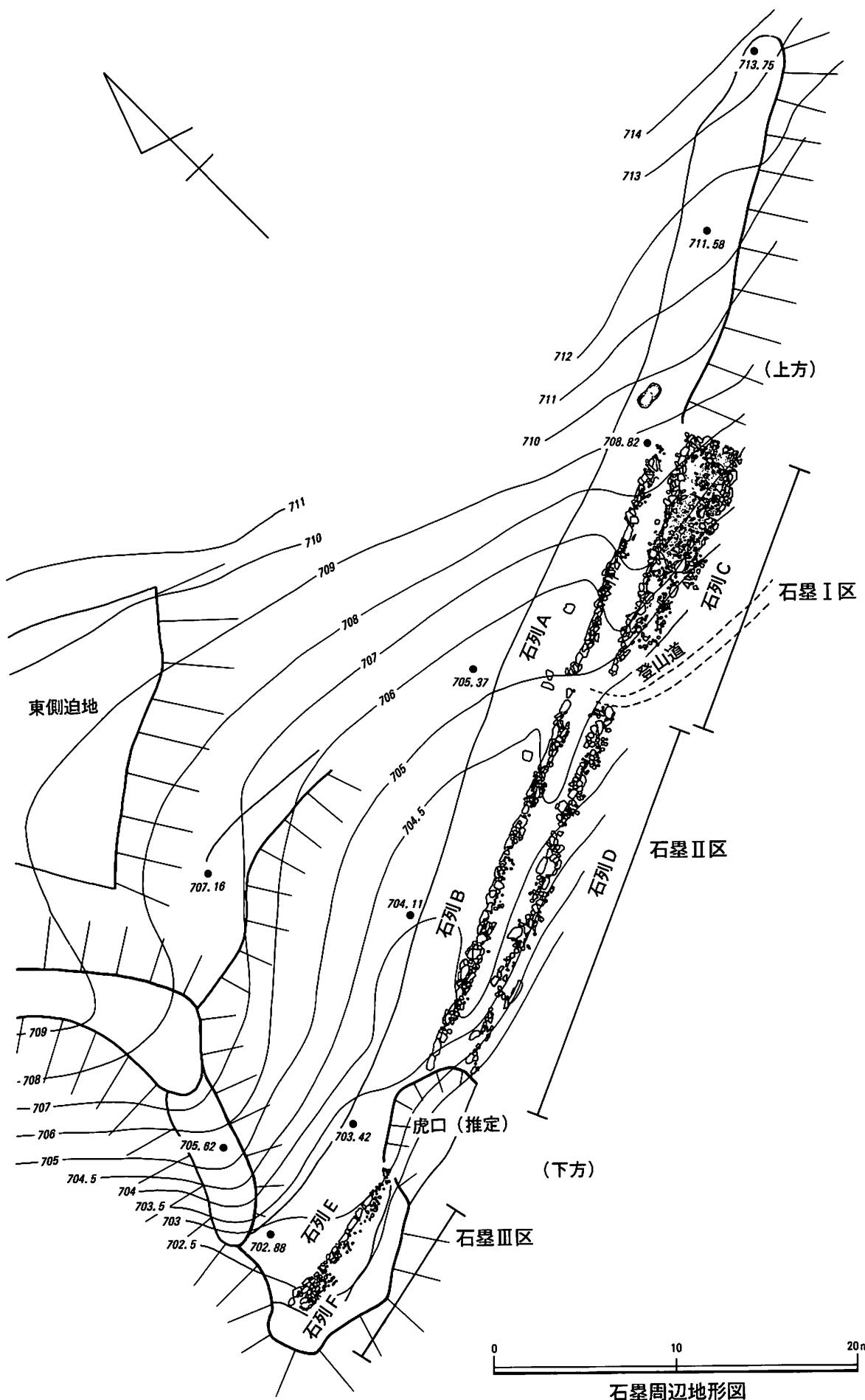
文献名	内容
隈部軍記	「肥後古記集覽」は、肥後国に關係した軍記・系図・地誌等の五十五種を、大石真磨が書写したものである。文政4~5年(1821~1822)に作成され、全三十五巻からなっている。 その中で、「隈部軍記」は、巻十に収録されている。九州制覇後の、豊臣秀吉の国衆達に対する本領安堵と隈部親安の城村城合戦(国衆一揆)を記している。
城村守戦記	「隈部軍記」と同じ、「肥後古記集覽」の巻十に収録されている。菊池氏滅後の、肥後の大友氏・龍造寺・島津氏の関り、国衆一揆の経緯と城村城合戦、一揆後の関係者処分を記している。 細川光尚が、城村城に籠城した老人達を招集し、聞き取った話の内容を、葦田玄了が筆記したものである。
隈部物語	「肥後古記集覽」巻十三に収録されている。「城村守戦記」と殆ど重なるが、隈部氏の事跡は、詳しく述べられている。特に、合勢川の戦い、龍造寺と島津氏の肥後侵略と隈部氏の関わり等が、取り上げられている。

[参考資料] 「隈部氏関係資料集」工藤敬一・「菊鹿町史」資料編補遺第一集 平成9年3月

*上記の一覧表は、「菊鹿町史」資料編補遺第一集に収録された工藤氏の文献解題を要約したものである。

第5表 文献解題一覧

写 真 図 版





図版1 猿返城跡・米の山城跡・八方ヶ岳 遠景 (下永野地区から望む)



図版2 猿返城跡・米の山城跡 遠景 (高池地区から望む)



図版3 石塁I区 石列A 中央から下方を望む



図版4 石塁I区 石列A 中央から上方を望む



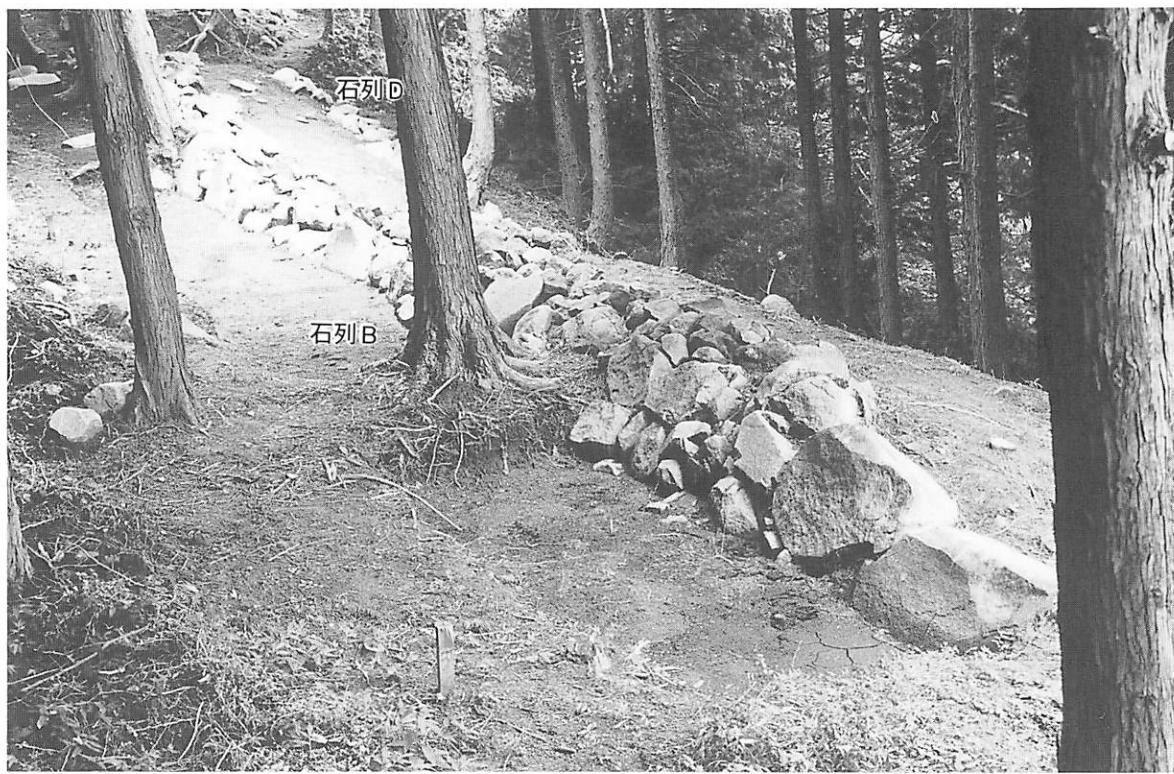
図版 5 石列 A 側面



図版 6 石壙 II 区 石列 B 側面



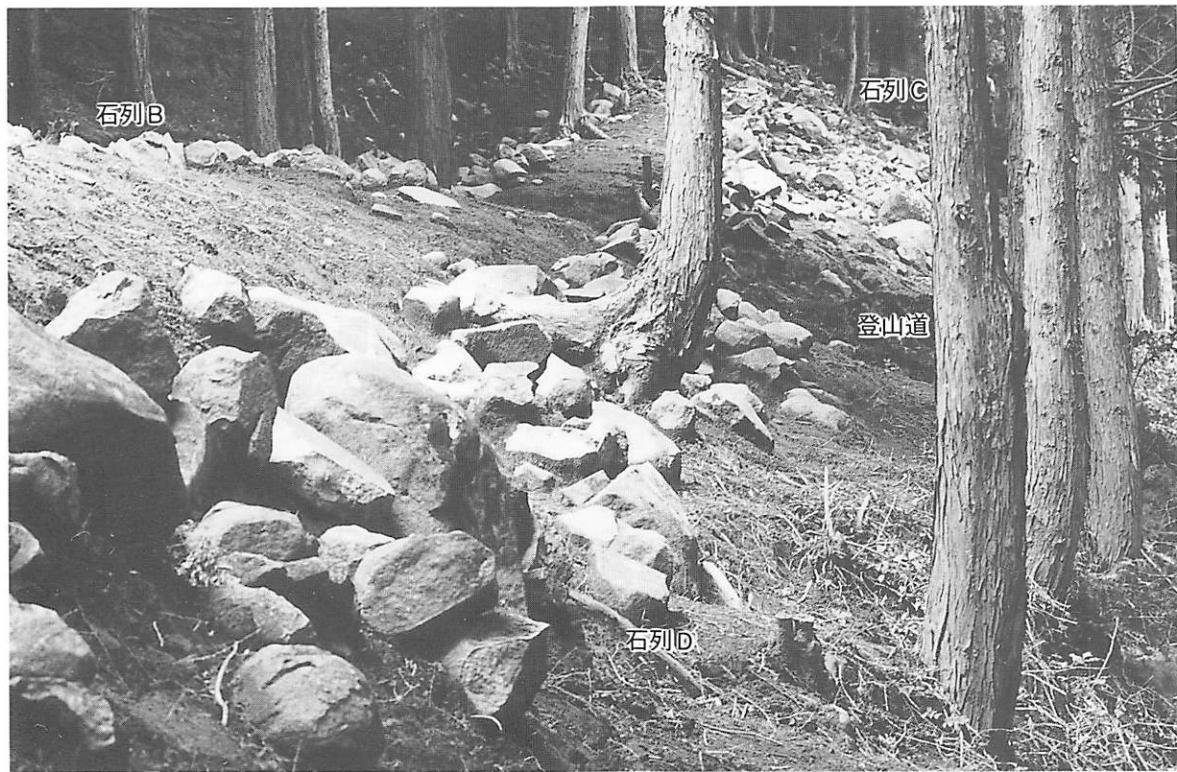
図版7 石塁II区 石列B側面



図版8 石塁II区 石列B 下方から上方を望む



図版9 石塁II区 石列B 上方から下方を望む



図版10 石塁II区 石列D側から石塁I区を望む

図版11 登山道から石壙II区を望む

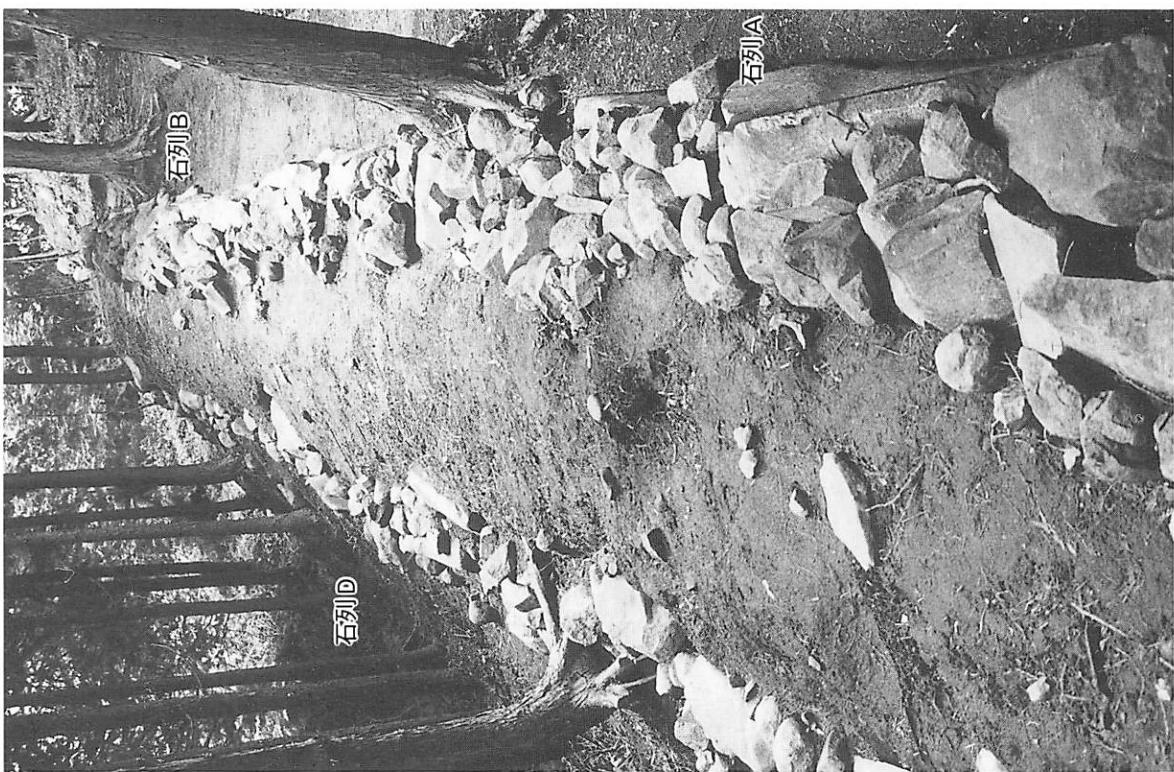


図版12 石壙II区 石列D側から下方を望む

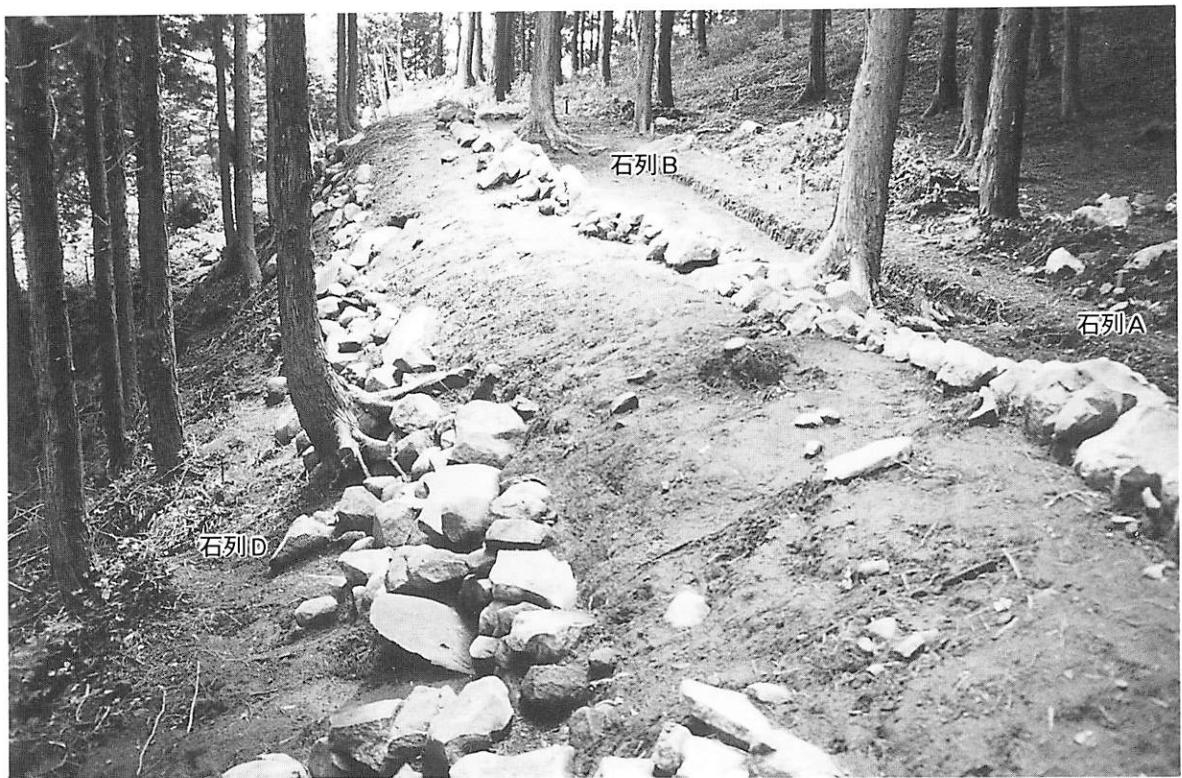




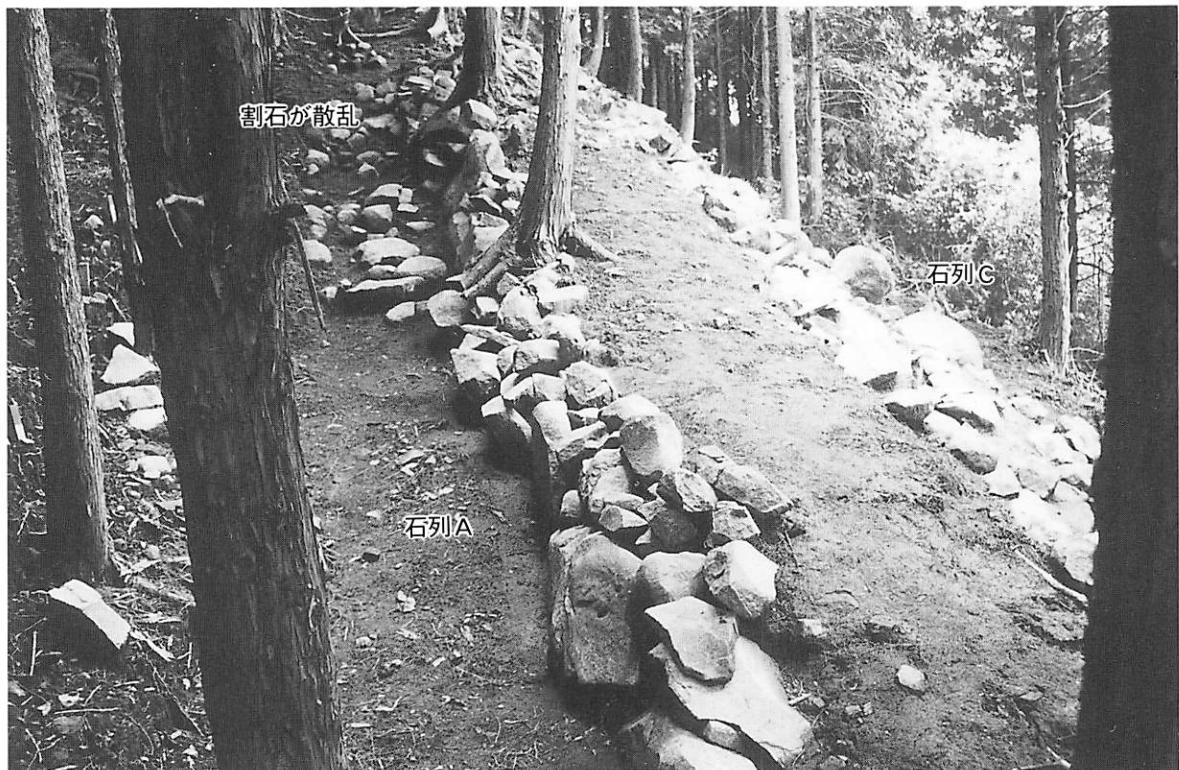
図版13 石壙II区 下方から上方を望む



図版14 石壙II区 上から下方を望む



図版15 石壙Ⅱ区 上方から下方を望む



図版16 石壙Ⅰ区 下方から上方を望む



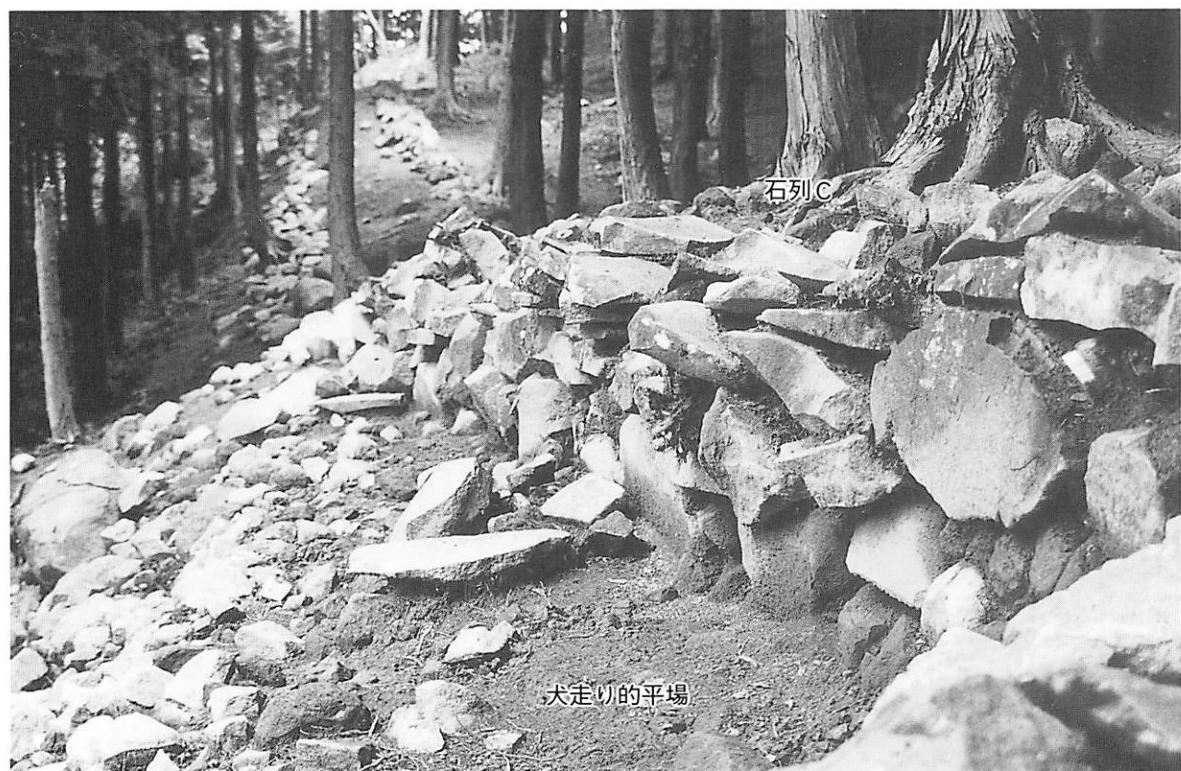
図版17 石壙II区 石列D側面 下方から上方を望む



図版18 石壙I区 石列C側面 上方から下方を望む



図版19 石墨Ⅰ区 石列C側面 上方から下方を望む



図版20 石列C



図版21 登山道から上方を望む



図版22 石墨Ⅰ区 石列C側面 下方から上方を望む



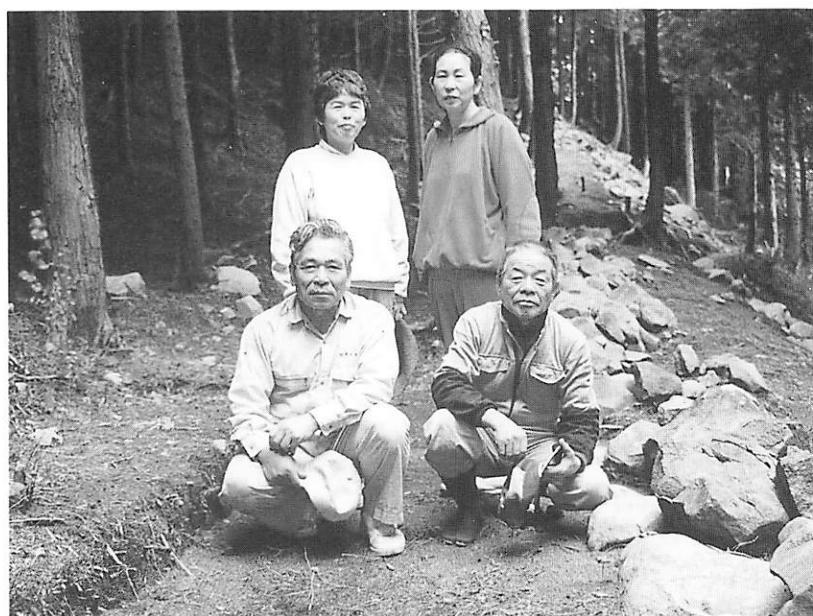
図版23 石壙Ⅲ区 石列 E



図版24 石壙Ⅲ区 石列 E の反対側斜面（崩壊している）



図版25 発掘調査風景



図版26 発掘調査従事者



1



2

図版27 出土遺物

菊鹿町文化財調査報告 第4集

米の山城跡 II

隈部館関連の砦跡

平成10年3月31日

[発行]

菊鹿町教育委員会

〒861-0406 熊本県鹿本郡菊鹿町大字下内田713

☎ 0968-48-3115

[印刷]

(株)大和印刷所

〒862-0931 熊本県熊本市戸島町920-11

☎ 096-380-0303

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『菊鹿町文化財調査報告第4集 米の山城跡Ⅱ』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：菊鹿町文化財調査報告第4集 米の山城跡Ⅱ—隈部館跡関連の砦跡—

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL:<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025年7月7日